

# メイド学校に通う佐天 さん

ラーフィ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

土御門舞夏と同じ繚乱家政女学校に通う佐天涙子。

彼女が派遣されたのはある男の部屋だった。

以前投稿していた小説の展開を少し変えて再投稿しています。よろしくお願ひします。

# 目次

## 第一章 幻想御手編

第一話 そんな出会いがあつたんです

よ ————— 1

第二話 不思議な人だなあ ————— 12

第三話 なんか私疑われてるんですけど!? ————— 25

第四話 話してみると案外普通の人で

した ————— 31

第五話 すごい能力って、憧れますよ

ね? ————— 43

第六話 ズルをするから、罰が与えら

れるんですね ————— 58

第七話 多分、色んな人に迷惑をかけ

たと思います ————— 70

第八話 でも、それ以上に得るものが

ありました ————— 89

第九話 大切な友達に気付かされまし

た ————— 106

第十話 大事な仲間の存在に気づかさ

れました。 ————— 121

第十一話 そう言えば新しい友だちが

出来たんですよ! ————— 136

第十二話 なんか様子がおかしいんで

すよね ————— 148

第十三話 私一人じゃ何も出来ない

第十四話

159

情報が欲しい

—

174



## 第一章 幻想御手編

### 第一話 そんな出会いがあったんですよ

どうしてこの学校に来たのか。それは母親から提案された条件があったからだ。

『学園都市に行かせてあげる代わりに、どの中学校に通わせるかは私が決めるからね』

当時能力というものに憧れていた自分からすればその条件は自分にとってメリットしかなかった。だから彼女は迷わず頷き、学園都市へ行くことが決定した。

あの日から毎日のように夢見た能力。

どんな能力が宿るのか考えていたら興奮して眠れなかった前夜。

そして、才能がないと烙印を押された入学当初。

彼女は何度も失望したし、何度も夢じやないかと思つたこともあつた。だが現実はその思うように動いてくれることもなく、彼女は学園都市の能力者の中の底辺、レベル0として生きていくことになった。

そんな彼女が通っている学校は繚乱家政女学校。第七学区にある中学校だ。

道路のガム剥がしから各国の首脳会議まで、それこそあらゆる局面で主人を補助することの出来るスペシャリスト育成を目指しているメイド養育施設。

土曜も日曜も無く夏休みも存在しないという学生にとつては過酷とも言える授業内容だった。

彼女はこの時初めて後悔した。あの時出された母親の条件を飲んだことを。

将来の夢など全くなかった彼女にとつて、それは両親からの少なからずの配慮だったのだろう。何でもできるということはもし今進んでいる道を変えたくなくてもそれに対応できるということ。両親は彼女がいつか夢が出来た時のためにどんな仕事でもこなせるように仕立て上げようとしていたのだ。

しかし彼女にとつてそれは苦痛でしかなかった。毎日のように出される課題、ハヤブサのごとく進む授業。恐らく他の学校の何倍もの勉強量が平凡で才能のない彼女に重くのしかかってきたのだ。

何度引きこもろうと思つたか。

何度ここから逃げ出そうと思つたか。

だがそうした時、両親はなんというのだろうか。能力は開花せず、ハードすぎる学校から逃げ出してきた彼女に、一体どんな言葉をかけるだろうか。

それは学校の課題よりも授業の速さよりも恐れるものだった。



聞きたくない。

言ってほしくない。

そんな目で見ないでほしい。

逃げ道などどこにもなかった。

そんな彼女を救ったのは、とあるエリート少女だった。

「へー、貴女の学校つてもう中世ヨーロッパの話してるんだ」

それは気分転換で屋外に解放されているレストランでジュースを飲みながら世界史の教科書を読んでいるときだった。

その少女は自分の向かい側の椅子に座り、肘をつきながら流れるように言葉を紡いでいった。

それは丁度彼女が習っている内容そのものだった。しかもその説明は先生の授業よりもはるかに分かりやすかった。50分の授業内容を僅か10分で語り、尚且つ彼女の脳に深く染み込んでいく。

驚き、尊敬し、嫉妬した。

同年代ぐらいのはずなのにどうしてこんなにも自分と違うのか。

それを聞くと、エリート少女は優しく微笑んで。

「私は単純に効率のいい覚え方をしてるだけ。これはどう覚えればいいのかとか、どの時間帯に勉強すればいいかとかね」

それが出来れば苦労しないんだよ、と彼女は思わず叫びそうになったがそんな事言ったら親切にしてくれているエリート少女に失礼だ。

すると突然「あつ」と思いついたような仕草をしたと思えば、彼女は突然こんなことを言ってきた。

「そうだ！私が色々教えてあげよっか？毎週ここぞ！」

それは力を持つ強者が弱者を見下ろすような態度ではなく、友達を助けたいと言わんばかりの純粹無垢な眼差しだった。

正直な感想を述べるなら心底驚いた。なんせ彼女はあのお嬢様学校とも言われてい

る常盤台中学の制服を身にまとっていたのだ。まだ五月だから冬服を着ていたためすぐに分かった。

お嬢様学校に通う生徒など威圧的な上から目線の態度を取るものだと思っていたし、今この瞬間もそう思っている。

同時に、どうしてエリート少女が自分にこんなに親切にしてくれるのか分からなかった。もしかしたら今後いつか今まで教えた分の貸しを返してもらおうよ、とか言われて悪事に手を染めることになるんじゃないかと懸念した時もあった。彼女が本当にお嬢様ならそうしてもおかしくない。

でも彼女にとってそれは一面砂漠の世界に現れたオアシスのようなものだった。たとえ上から目線の態度で来られようとも、この世界で生きていくには我慢するしかない。そう結論つけて、元氣よく頷いて、彼女は頭を下げた。

「私は御坂美琴。あなたは？」

エリート少女が名を名乗ってきたので、彼女はゆっくりと顔を上げて、慣れ親しんだその名を口にする。

「……佐天、涙子です」

そんな出会いからもう一ヶ月の月日が経っていた。

「いやー御坂さんってやつぱり頭いいですよねー」

「そんなことないわよ。佐天さんだって頑張ってるじゃない」

「まーそうなんですけどね。でも中々うまくいなくて……」

「そうなの？」

「はい。おかげさまで私だけ実施研修の補講が入りまして……」

今日も初めて出会ったこのレストランの屋外で、友人の御坂と勉強しながらの会話を楽しんでいた。

あの後御坂とは歯車が綺麗にハマったように驚くような速さで仲を深めていった。まだ一ヶ月しか経っていないものの、二人は親友とも呼べる仲にまで発展していて、頻繁に連絡も取り合っていた。

しかしいくら御坂が頭が良く教え方もうまいとはいえ一ヶ月程度では周りの皆に追いつくのは難しい。結局佐天は学年最下位を独走するはめになってしまった。

「でもこれからよ。佐天さんも頑張れば大丈夫だって!」

「だと良いんですけどね……っていうか御坂さん今日機嫌良いですね」

「そ、そう?」

「うーん?これは……まさかラヴの予感が!?」

「ないないない!!アイツは全く関係ないから!!」

「……アイツ?」

「あつ、えつと」

「フフフ、これは色々聞かないといけないですね!!」

「ちよ!?!」

両手の五本指を波打つようにメラメラと動かしながらじつくりと御坂へ近づいていく。

「……と言いたいところなんです」

「へ?」

「明日の準備があるので早めに帰らないといけないですよ」

「ああ、研修の?」

「はい」

ちよつと寂しそうな表情で別れを惜しむ佐天に御坂は出会った時のように優しく微笑んで、

「でも会えなくなるわけじゃないでしょ?」

「まあそうなんですけどね」

「なら大丈夫よ。佐天さんなら出来るから!」

「……ありがとうございます」

「今度は黒子や初春さんを連れてどっか遊びに行こ!」

「はい! 楽しみにしてますね!」

いつもは二、三時間一緒にいるのだが一時間ほどで切り上げて佐天は自分の住む寮へと戻っていった。

寮に着いた佐天は、早速明日向かう住所や時間を確認した。

どうやら佐天が向かうのはとある人の寮の一部屋らしいのだが、この決定に対して還暦寸前の女の担任の先生は首を傾げていた。

『本来実施研修は極一部の優秀な生徒のみに与えられる科目なのよ。『上』の命令だから仕方ないけど……何を考えているのかしら』

これは今までの繚乱家政女学校の歴史にもなかった事だ。それも佐天は優秀とはかけ離れた成績を出している。先生たちも全く理解できていないようだ。

担任の先生は校長先生に話を聞きに行ったららしいのだがどうやらこれは『上』からの決定事項らしく、撤回は出来ないらしい。

その理由は校長先生でも知らないらしいが、上からの命令となれば逆らうことは出来ない。

佐天はどうしようもない不安に駆られながら夜を明かした。

次の日、佐天は言われた通り、朝六時にその人が住む寮の前に着いた。

普通こういった実施研修の始まりの時はその場所に行ったときに先導してくれる先生やその道のプロがいるはずなのだが、今回はレアなケースで一個人に対してのお手伝いなので、出迎えてくれる人などはいなかった。

佐天は改めて住所を確認する。何度も読み直し、待ち合わせの時刻もしつかりと確認した上で、その人物の名前とそこに貼られている顔写真を交互に見た。

年齢は自分より年上だと思いが能力者なのでそんなに年の差はないと推測。顔を見る限りでは男、その割には髪が肩にかかるぐらいに長い。何より印象に残るのがアルビノのような白髪赤眼、この目つきの悪さ。一体何をそんな苛ついたらこんな顔になるのかっていうぐらい酷い面をしている。

そして重要な名前。それはこれが本名なのか、本当に日本人なのかというぐらい異質な名前だった。



その人物の部屋のドアの前まで来て、その名を口にする。

「アクセラレーターさん、か……」

この出会いが、彼女の人生を大きく変えることになる。

## 第二話 不思議な人だなあ

寮の部屋の前に着いた佐天は迷わずインターホンを鳴らした。

ピンポンという軽はずみな音が聞こえたが、一分経つても本人が出てくる気配はない。

もう一度鳴らしてみたものの反応はなし。

出かけてるのか、と思ったが恐らく今日自分がここに来ることは分かっているはずだ。ならばそんな日に出かけたりするだろうか。

不審に思い、とりあえずドアノブを回してみると。

「あれ、開いてる……？」

そのまま扉を開くと、まず玄関があり、そのまま廊下に沿って部屋があつた。玄関には男物の靴が一つ置いてあるだけで他に靴はない。恐らくこの家主の物だろう。

このままでは不法侵入者と思われるかねないので取り合えず声を上げてみる。

「すみませーん。アクセラレータさんいますかー？」

しかし返事はない。一瞬部屋を間違えたかとも思ったが何度も書類を確認したので

それはあり得なかつた。

やはり留守なのだろうか。

考えてみればそうかもしれない。一人暮らしとは言え普通靴は二足以上持つものだ。雨の日に濡れた時ように持つのは自然な流れと言える。

「やっぱいいいのかなあ」

そう思い、佐天は部屋に上がって中の様子を探ってみた。

この部屋はIKの小さな寮。玄関から続く廊下にはトイレとバスタブ、キッチンとといった必要最低限の備えしかない。

そうして、小さな部屋を覗き込むような形で見て、身体が震え上がった。

「誰かいるー!!?」

言わずともこの部屋の主に決まっているのだが何度も呼び鈴を鳴らしても起きなかつたことから勝手にいないものだと思っていたのだ。

部屋の主であるアクセラレータという男はベッドではなくソファに寝ており、寝間着を着ているわけでもなく、布団をかけているわけでもなく、私服のままダイレクトにソファに寝転がってそのまま寝てしまったという感じで寝転がっていた。

声を掛けるかどうか少し迷ったが、このまま突っ立ってはいはそれこそ不審者と思われかねないので寝転がっている男に話しかけてみた。

「アクセラレータさん？」

反応はなし。

「あの一……」

起きる気配はない。

「ちよつと……一！」

と、身体をさすろうとした瞬間、その指先に電撃のような痛みが走った。

「痛っ……」

静電気に触れてしまった痛みに似ていただろうか。とにかくこの男に触れようとした瞬間理由も分からない痛みに襲われたのだ。今はまだ六月上旬。静電気に悩む季節ではないし、佐天自身あまり静電気に敏感なわけでもない。

もう一度触ろうとして、触れるその一瞬前に痛みが走った。

「何なんだろう……」

痛みがあつた指先を不思議そうに眺めながら、その男の姿を改めて確認した。

年はやはり自分より少し年上の男性。高校生ぐらいだろうか。髪は白髪と日本人離れした髪色だったが、その髪は女性が羨んでしまうほど綺麗で触るまでもなくサラサラだと思わせる印象があつた。

実は外国人で男性よりの顔をした女性だったり？

そんな考えも一瞬よぎったが、それは男の言葉でかき消された。

「……誰だテメエ」

佐天が自分の世界に入っている際に起きてしまったようだ。佐天は身体を震わせ勢いよく立ち上がって距離を取りながら綺麗なお辞儀をした。

「は、初めまして！今日から世話係をすることになった佐天涙子です!!よろしくお願いします!!」

「……世話係だど?」

そんな佐天のテンパリなど気にする様子もなくアクセラレータ……一方通行は眉をひそめる。

「は、はい。そういうことで派遣されたんですが……」

「誰からの命令だ」

「えっと、繚乱家政女学校から……あ、でも何か上からの命令って言ったような」

「……チツ、何を企んでんだ上層部の野郎は」

何か思い当たる節があるのか一方通行は不機嫌そうに舌打ちをする。

しかし暗部に身を浸らせている一方通行は上からの命令という言葉聞いて胸糞悪い吐き気を覚えた。この学園都市には大きな見えない闇が潜んでおり、一方通行はそれにとっぷりと浸かっている。上層部の連中が考えていることなんぞ知る由もないがそ

れがくだらないことに利用されていることぐらいすぐに分かる。

この佐天という女性からは闇を感じさせるものが何一つ感じられない。一度それに浸った者は少なからずその片鱗を見せるのだが……まあ彼女のしていることが演技という可能性も否定できないが。

なんとなくだが、そうであつて欲しくないと思つてしまった。

それが何なのか、今の彼には理解しようとも思わなかった。

「……まあいい。世話係つてことは俺は何でも命令していいつてことだな？」

「えっと、私に出来る範囲なら……」

「じゃあコーヒー20本」

「……はい？」

「レッドマウンテンのブラックコーヒーだ。その辺のコンビニで売ってる。金は俺のカードでも使つてろ」

と言つて気怠そうに机の上のクレジットカードを指さしながら一方通行は再び眠りに落ちた。

ええ、と困惑する佐天など気にする様子もなく、彼は再び反射の設定を変えて音を完

全反射する。

「(……上の連中がこの女を俺のところによこすメリットはなんだ?)」

その眠りに落ちる寸前、彼は疑問に上がったものを頭の中で整理していく。

「(実験中の俺を殺しにくるとは思えねエし、もしそうならわざわざ起きるまで待つ必要はない。あの女は……おそらく何も知らされていない)」

メイド服をまとった少女の顔をもう一度思い出しながら、学園都市の考えを読み取っていく。

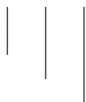
「(つまり俺とあの女を一緒にいさせて初めて意味がある……)」

だが一方通行から見た佐天は本当にその辺にいる奴らと大差ないように思えた。

「(つてことは能力か?……そういや、あの女的能力を聞いてなかったな)」

そこまで考えて一方通行は考えるのをやめた。

「(……後で聞いてくか)」



佐天は学校の成績は悪いが幼少期から母親の家事の手伝いをしていたこともあり、人並み以上の家事をこなすことは出来ていた。

コーヒーを買ってきた佐天は掃除もせずゴミも放置されっぱなしの部屋を一通り掃除しようかとあらかじめ持ってきておいた雑巾や洗剤一式をカバンの中から取り出し……たところでまずゴミ捨てから始めようと思いついて部屋の中を見回した。

改めて見ると、言うほど散らかってはいなかった。確かにありとあらゆるところにコーヒーの缶が捨ててあるが、言ってしまうえばそれだけ。床が見えなくなるほどゴミが散らかっているだとか耐え難い臭いがするだとかそんなことはない。

とりあえず窓を開けて換気をし、落ちている缶を拾っていく。この間も一方通行はソファで寝ていた。未だにここが世話係として派遣された場所なのか疑いたくなるぐらいに。

「(不思議な人だよなあ)」

どうやら一方通行本人も自分がここに来ることを知らなかったみたいだし、それなのにどこかに確認を取ったり佐天に詳しい話を聞こうとしない。

それが当たり前のことだと受け入れているようで、不思議な感じがした。



「それじゃ、さっさと終わらせますか」

ゴミをきちんと回収し終わったところで佐天はせつせと床拭きを始めた。

大体の掃除を終わらせてから、実施研修だろうと構わず授業を行っている学校へと向かっていった。

時刻は夕方になり、学校から帰ってきた佐天は掃除も済ませて夕飯の買い出しへ行つたところだった。今日は昨日ネットで見つけたグラタンにしよう、と考えながら食材を買っていった。

お金はもちろん一方通行のカードで払った。自由に使ってもいいということなのでありがたく使わせていただいている。

買い物物を済ませスーパーから出た時、なにやら知り合いに似た人影を見つけた。その人物にそっくりだった。

「(御坂さん……なのかな今の人)」

しかしその表情、仕草、何より頭の上につけているゴーグルのようなものがそれがあの御坂美琴の趣味とは思えなかった。

御坂美琴は子供向けのキャラクターなどを好む傾向があり、サバイバルゲームに出てくるようなゴーグルを掛けるのはとても思えなかった。

「(もしかして妹さんとか? ……あ、でも兄弟はいないって言っていたし)」

常盤台中学の制服を身にまとった御坂によく似た少女。その姿は追いかけて追いつくとする佐天を振り払うかのように人込みに紛れていき、追跡は困難になった。

「……気のせいだよね」

と適当に結論づけて佐天はその場を後にした。

「あれ?」

一方通行の部屋に戻ってくると、そこに一方通行の姿はなかった。

今日一日何をしたかと言えばトイレに行き、コーヒーを飲み、寝転んでいただけだ。働かないもいいたところだが、ここまでするといつぞ清々しい。

そんな彼が急に姿を消した。

でも佐天はそんなに気にしていなかった。どこかのコンビニ行つたのかもしれないし、気分転換に散歩でも行つたのかもしれない。ずっと家に閉じこもって生活する人なんて殆どいないのだからそれも人間としての当たり前の本能だったのかもしれない。

そんなことを考えながら佐天は夕飯の準備を始めた。

まさかあんなおぞましい実験をしている最中だとも知らずに。



繚乱家政女学校では生徒用の寮が設けられており、ここに通う生徒は例外を除きここで生活することになっている。

もちろん門限もきつく設定されており、一秒でも門限に遅れたら成績に大きく影響するといった中々厳しい規則があるのだ。

佐天は門限ギリギリで寮の門を潜り抜けて自分の部屋に戻っていった。

扉を開けると、そこから気の抜けた声が返ってきた。

「おー遅かったな涙子。何してたんだー？」

彼女は自分と同じ屋根の下に住む土御門舞夏。佐天と同級生で一年生から実施研修を任されたもう一人の女の子である。

もちろん佐天とは違い、成績優秀者のみに与えられる実施研修の椅子を確保したいわゆるエリートである。

「どうもこうもないよー……」

「んー？」

「あの後結局帰ってこなかったし、ギリギリまで待ってたから門限守れず罰則食らうと

ころだったし……最悪の滑り出してところかな」

「……話が見えないんだが、要は面倒な奴の世話係なつたつてことでもいいのかー?」

荷物を適当に置き、部屋着に着替えることもしないまま佐天はベッドに倒れこむような形で寝転がりながら答えた。

「……まあ、そんな感じ。舞夏の方はどうなの?」

「常盤台中学の寮は楽しいぞー。教えてくれるシェフは一流ばかりで勉強になるし同じ年代の生徒しかいないから話しやすいしなー。もう友達が五人も出来たんだぞー」

「何それ羨ましいんだけど」

「まあなー」

「そういえば昨日の夜帰ってこなかったけど何してたの?」

「ふえ?……あ、兄貴が風邪を引いたから、そのまま兄貴の家に泊ったんだ。もちろん寮監には連絡してなー!」

この時、あからさまに顔を赤らめ動揺している舞夏の様子に汚れている一部の大人は「そういうことか」と気づけたかもしれないが、純粹無垢で疲れている佐天にはそんな事気づけるはずもなく。

「そっかー……」

そしてその声が寝息へと変わっていったのはすぐのことだった。

「むむ、風呂も入らず歯磨きもせず仕事着のまま眠りに落ちるとはメイドの風上にも置けんな」

だが舞夏は無理に起こそうとはしなかった。風呂と歯磨きは最悪朝にやってしまえばいいし、メイド服にしわが出来てしまいがメイド服は数着の予備を用意してあるので明日はそれを着れば問題ない。

それより、なんだかんだ言いながらどこか楽しそうに眠りに落ちた佐天の表情をもう少し眺めたいと、親友の土御門舞夏は思った。

## 第三話 なんかに私疑われてるんですけど!?

「無能力者だア？」

「はい。確か空力使い（エアロハンド）ですけど……それが何か？」

首を傾げてかわいらしく問う佐天に、一方通行は呆氣に取られた。

暗部が一方通行を利用するとしたらまず能力関係のことだろう。というよりそれ以外考えられない。

その考えから推測するに、佐天は一方通行の能力——ベクトル操作の能力者、あるいはそれに関連する能力の持ち主だと思っただのだ。もし彼女がベクトル操作の能力を持つているのだとしたら上が黙ってはいないだろう。僅かに地から出た芽を開花にさせようと努力するに違いない。

しかし聞いてみたらどうだ？ただの空力使いではないか。この能力自体は珍しくないし、実際彼女の上位互換は山ほどいる。

ますます上層部のやっていることが理解出来ない。でも嫌がらせとは思えない。しかしこの純粹無垢な少女に価値があるとも思えない。

まだ見ぬ力が彼女に眠っているというならば話は別だが、どうもそうは思えない

一方通行は考えた。もし彼女が本当は上からの命令ではなく、彼女個人としてこの家にやってきたのではないかと。

それなら色々辻褃が合ってくる。彼女がレベル0でありながら反射に驚かなかつたのも、どうして今の今まで平気な顔して学園都市のレベル5と接触しているのかを。

「テメエ、俺が誰だか分かってんのか？」

「はい。アクセラレーターさんですよね？」

「……チツ」

最初は自分を殺しに来てるのかと考えた。だが実験中の自分を殺しに来るとは考えにくいし、本当に殺しに来てるのであれば寝込みを襲えばよかつたのだ。

殺害でもなく能力関係でもない。

ならば、一体なんだ？

「(……まあ、俺の邪魔さえしなけりや何でもいいけどよ)」

「あ、そういうえば今日の夕飯の材料買ってなかつたですね。ちよつと出かけてきます」と、佐天は自分がどれだけ悩んでいるかも知らないでさっさと出ていってしまった。



よく分からず派遣された彼女と、よく分からず振り回されている彼の奇妙な関係は暫く続いた。

—  
—  
—  
—

「あ、うどんとそばどっちがいいですか？」

「……食べれば何でもいい」

「そういえばこの前私の学校近くにフォーティワンっていうアイス屋が出来たんです

よー」

「……どオでもいい」

「あの、世界史を教えてほしいんですけど……」

「……チツ。どこだ？」

「ここら辺なんですけど……」

何も変わることのなかった日常に、新たに加わった、どこにでも居そうな少女。

きつと彼女は誰かの思惑通りに動かされ、知らぬままに操られているのだろう。

だが彼は少女を突き放そうとはしなかった。

彼女の事を思うのならば、早めに縁を切っておいた方がいいと理解しておきながら、それが何なのか。今の彼には分からなかった。



朝に自分のところに来て朝ごはんを作り、掃除を済ませてから彼女は学校へ行く。夕方になるとまたやってきて夕食を作るのはもちろん、世間話や勉強を見てもらったりして――

今までの経験では考えられない程普通の日常生活を送っていた。

数日経てば、研究者や自分を倒そうとする不良たち、まだ可能性として捨てきれない佐天からなんらかのアクションがあると思っていた。しかし自分を取り巻く環境は変わる兆しすら見えない。

何日経っても彼女は変わらずここに現れ、記憶に残らないようなありきたりな会話を繰り返していく。

だから、きつと心のゆるみが生まれてしまったのだろう。

「あ、そうだ。アクセラレーターさんて長いですし、あーくんって呼んでもいいですか？」

「……好きにしろ」

「じゃあそう呼ばせていただきますね！」

こんな提案をあつさり受け入れるなんて、研究者が見たらきつと腰を抜かすだろう。それだけ、彼は成長……いや、元の『彼』へと戻っていつている証ではないだろうか。

## 第四話 話してみると案外普通の人でした

街を行く人混みの中に、見知った後ろ姿を見かけた。

「御坂さん！」

御坂と呼ばれた彼女は肩のところまで切られた茶髪を揺らしながらゆっくりと振り向く。

「あ、佐天さん」

手をハラハラと振って佐天が追いつくのを待ってからまた歩き始めた。

ちなみに佐天は繚乱家政女学校の校則の関係で外に出るときは例外を除き常にメイド服じゃないとダメなため、こうしている今でもメイドの恰好で歩いているのだ。常盤台中学の制服を着た女の子とメイド服を着た女の子が一緒に歩いている姿はありとあらゆる人の視線を釘付けにしたが二人はそんなことを気にする様子もなく。

「そつちの様子はどうか？」

「最近やつとまともに話が出来るようになりましたよ。今までは何回話しかけてもうんともすんとも言わなかったから」

「え、佐天さんって赤ちゃんの世話でもしてるの？」

言いながら二人はとある場所へと向かっていった。それは二人が最初に出会った場所であり、仲良し四人組の集合場所でもあるところ。

「今日はお仕事休み？」

「はい。ほとんどない大切な休日なんですよー！」

「……全く、黒子や初春さんもそうだけど……ちよつと働きすぎなんじゃない？」

そう、彼女たちは能力者であるため忘れがちだが御坂は中学二年、ほかの三人は中学一年生なのだ。世間一般ではまだ働く年ではないのだが、風紀委員やメイドといった学園都市で知られていたり知られていなかったりする仕事をこなしているのだ。

これでは年上の自分だけがサボってるみたいじゃない、と御坂は最近思い始めている。もちろん友達として三人の身体の心配もしているのだが。

と二人が仲良く会話している内に目的のレストランの前に着いた。その名も『あずきの真髓』。一体何がどうなつてこんな名前になったのか店長に聞いた。ただしい程変わった名前のレストランだった。

いつものように野外に開放されている席の方へ向かうと、そこには二人の先客がいた。

「あ、御坂さんに佐天さん」

「お姉さまあああ!!」

「黒子！テレポートで抱き着いてくんない！」

「私お姉さまと会うのを楽しみにしておりましたのよー!!」

「いつも寮で顔合わせてるでしようがー!!」

御坂の事を『お姉さま』と呼び慕う彼女は白井黒子。空間移動という珍しい能力を持つ大能力者（レベル4）で正義感の強い中学一年生なのだが御坂に対しての性癖が異常者が異常だと言うほど異常なのだ。自称『お姉さまの露払い』らしいが白井自身が露なのでは、と佐天は最近思い始めている。

「うーいーはーるー!!」

「はっー!」

「なっ、座っているからスカートを捲れないだど!?」

「ええ、私がそう何回もスカートを捲らせると思いましたか！残念ですな佐天さん。私だって恥があるってことを知ってくださいー!」

「でも花柄のパンツは可愛いよね」

「なんで分かったんですか!?!」

顔を赤くしながらポカポカと佐天の胸元を叩いているのは初春飾利。定温保存という低能力者（レベル1）。ショートヘアの頭に造花の飾りの付いたカチューシャを付けており、ひ弱そうな身体をしているがこれでも白井と同じ風紀委員なのだ。能力、身体

能力が劣る彼女が風紀委員になれたのは彼女が持つ超一流のハッカー能力があったからだ。ハッカーに詳しい人からは『守護神（ゴールキーパー）』と呼ばれているらしい。「別にいいではありませんの。今日は特に忙しかったですし」

「忙しかったって？」

「この前の爆弾魔、覚えてらっしゃいますよね」

「ええ。あの薄汚い奴でしょ？」

「その男が今日取り調べ中に急に倒れましたの」

「え!？」

それはつい先日まで学園都市で起こっていた風紀委員が九人も負傷するという異常な連続爆破事件。通常の爆弾とは違い、時間や場所に法則性がないため犯人の特定に時間がかかったが、標的にされた初春が死んだと思つて高笑いしているところを御坂に見つかり、制裁を受けたのだ。

その犯人の介旅初矢は警備員に捕まり、今日事情聴取を受けていたはずだが。

「えつと、まさか私が殴ったからとか……?」

「いいえ。脳に異常は見られませんでしたが、それに意識不明で倒れたのは介旅だけではありません。ここ数日で原因不明で倒れる患者が急に増えてるようですの」

「嘘っ!？」



「我々風紀委員にも原因を究明するように言われましたわ。医学的な原因が見つからない以上、外部から何らかの力が働いているのかもって」

「それで私色々調べたんですけど、今朝こんなスレを見つけまして」

と初春がノートパソコンを操作して、その画面を三人に見せる。席を立って覗き込むと「速報」能力を底上げする道具が見つかる」といういかにもスレらしい題名が書かれていた。

そこには道具の存在を信じる者、信じない者、そもそも興味がない者など様々いたが、全員のコメントに共通していたのはある単語の存在だった。

「幻想御手？」

「あ、私知ってます。でもどこかの学者が残した論文だとか、料理のレシピだとか色々な噂があつてよく分かんないですよね」

「でも、もしその幻想御手が能力を底上げするモノだとしたら、そのために起こった脳への負荷が原因で倒れたつてことが考えられるんじゃない？」

「その可能性は否定しませんが……信憑性が低すぎますの。まだ断定するのは良くないですわね」

スレや佐天の発言からも明確な言葉は得られなかった。黒子はうーんと唸りながら、今後のことについて考えていく。

「幻想御手かあ……」

「どうしたの佐天さん？」

「あーいや、やっぱり無能力者（レベル0）の私からすると能力に憧れるっていうか……使ってみたくないなーって」

「ダメよ。もし何らかの手段を用いて手に入ったとしても絶対に使ったらダメー！」

「ええ……」

「佐天さんのために思って言ってるのよ！確かに能力に憧れる気持ちは分からなくはないけど……」

「……でも——」

「とにかく」

と、佐天が何か言おうとしたところだった。白井がそれを遮るように口を開く。

「幻想御手についてはもう少し調べる必要があるそうですわね。専門家に聞いた方が良いかと」

「あ、それならこの人に聞いてみてはどうですか？脳の専門家の木山春生先生。意識不明で倒れている人が入院している病院に明日訪れるそうですよ」

「脳の専門家……確かにその人なら何か手掛かりを知っていそうですわね」

「んじゃ明日行ってみますか」

「……どうしてそこでお姉さまが仕切るんですの？」

その日の夜。佐天はノートパソコンをカタカタといじりながら幻想御手について調べていた。噂の真実を突き止めたかったのと……どうしてもそれを手に入れたかったという理由で。

「うーん……兄貴いー……」

相部屋の舞夏はそんな寝言を発しながら寝ていた。何がどうなればここまで兄のことを溺愛するのか不明なところだが、今回は好都合だった。

起きていたら『何を見てるんだー？』とか言つて覗き込んでくるに決まっている。佐天はあまり音をたてないようにこっそり調べていく。

しかし。

「見つからないなあ……」

かれこれ一時間近く経つのだが幻想御手の正体については全く掴むことが出来なかった。

やはり噂は噂なのか、そう結論づけてそろそろ自分も寝ようと思い始めた――

――その時だった。

「(……ん?)」

マウスポインタの矢印をそのページの題名の部分に指した時、その題名の文字の一部が反応したのだ。

「(隠しページ?)」

どうしてこんなところに、と思いつながらも佐天はそれをクリックする。すると不気味に思えてくるほど何もない真っ黒なページに飛んだ。気になってページの下の方までスクロールしていくと、白い文字でこう書かれていた。

D L

T I T L E : L e v e l U p p e r

A R T I S T : U N K N O W N

「……………これって」

—  
—  
—  
—

佐天は今日も一方通行の家へと訪れていた。相変わらずソファに寝ころんだまま起きようとしないが、ここ最近は変化があった。

「じゃーん！見てくださいこれ！」

「……………ただの音楽プレーヤーじゃねエか」

「ふふふ、実はこれにはある仕掛けがありますよ！ねえ」

「そオカよ」

「あ！まだ話は終わってないですよ！！こら寝ないで聞きなさいあーくん！音を全反射し

ないでください!!」

「……うるせエ」

「あ、ちゃんと聞いてくれてますね。なんとこの中には幻想御手が入ってるんですよ!」

「幻想御手だア?」

「はい、能力を底上げする道具なんです!」

能力を底上げ、という言葉聞いて一方通行は一瞬眉をひそめたが佐天はそれに気づいていないようだ。

「……」

「……あれ?驚かないんですか?」

自信満々に披露したギャグが滑ったような空気が漂っていたが、一方通行は微塵にも気にしていなかった。

それよりも気になったのは幻想御手の存在。『実験』のこともあつて今の一方通行はそういう話に特に敏感になっていたのだ。

佐天が音楽プレーヤーを出して自慢してきたということは幻想御手は音楽そのもの。聞くだけで能力が上がるというバカげた話。

一方通行はその存在を全く知らなかったし、それを聞いた今でもそんなものただの幻想にすぎないものだと思うっている。なぜなら音楽を聴くだけでレベルが上がるのなら、

『実験』する必要なんてないからだ。

だから。

「……くだらねエ」

一言で切り捨てる。そんなものは存在しないんだと。

「……その様子だと信じていませんね？」

「当たり前だ」

「いいですよーだ。私がレベル上がって度肝抜かさないように注意してくださいね」

「言ってる」

一方通行が面倒くさそうに話を切り上げると佐天もこれ以上機嫌を損ねないように雑巾に手をかける。

これから夏本番。蒸し暑くなってくる中で佐天は冷房を付けず窓を全開にして拭き掃除を始めた。

そんな佐天の姿を睨むように凝視しながら、一方通行は考える。

「まさかこれも『上』の奴らの差し金か？」

佐天は学園都市の上層部に位置する人たちから直々に配属されたのだ。その裏の理由は見当もついていないが、この幻想御手の存在自体を佐天に持たせることに意味があったのだろうか。しかしそれには幻想御手に関する情報が少なすぎる。こんな状態

で結論を出せるはずがなかった。

一方通行は掃除を終えた佐天に幻想御手について聞こうとしたが。

「オイ——」

「あ、ちよつと今から出かけますね。夕方頃には帰ってくるので」

絶妙にタイミングが悪かったようだ。一方通行は舌打ちしながら適当に答える。

「そオかよ」

「じゃあ行つてきまーす！」

くるつとターンして玄関へと一直線に向かった。佐天がいなくなったのを確認し、一方通行はゆつくりと立ちあがる。

そのまま押し入れの扉を開けて中を確認する。そこには適当に買った服と佐天がメイドとして使う道具やら様々入っていたが、一方通行が求めたのは奥の方に眠っていたノートパソコンだった。普段は全く使うことはないが念のために買っておいて正解だった。そう思いながらパソコンを立ち上げてあるワードについて検索をかける。

もちろん、幻想御手についてだ。



## 第五話 すごい能力って、憧れますよね？

時刻は昼過ぎ。幻想御手について脳の専門家である木山春生に話を聞きに病院まで行ったのだが、その日は病院で停電が起こっておりクーラーが効かなかつた。そのため、暑い病院ではなく涼しいレストランに移動しようということで五人はレストランに來ていた。

「さて話の続きだが、同程度の露出でもなぜ水着は良くて下着はダメなのか……」

「いや、そっちではなく」

「メイドからアドバイスするなら、場所によります」

「……なるほど」

「佐天さんも真面目に答ええないの」

「アハハ……」

佐天が申し訳なさそうに笑うと白井が咳払いして、話を切り出す。

「幻想御手について話を聞きたいんですの」

彼女たちが持っている幻想御手についての情報を可能な限り出したところで、木山が口を開いた。

「レベルアップ……それはどういったシステムで動いているんだ？形状は？どうやって使う？」

「それはまだ分かりませんの」

「ではなぜその話を私に？」

「能力を向上させるといふ事は、脳に干渉するシステムである可能性が高いと思われる。もし見つかったら、専門家である木山先生に調べてほしいんですの」

「なるほど……むしろこちらからお願ひしたい。脳の専門家として、それはとても興味深くある」

白井達が期待していた答えは返ってこなかったが、それでも脳の専門家が協力してくれたことはとても大きな進歩だ。御坂達もそれを実感し、思わず笑みをこぼした。

ただし。

「あの、幻想御手を持っている人を見つけた場合、白井さんはどうするんですか？」

佐天涙子を除いて。

「調査中なのでまだハッキリしたことは言えませんが、今は幻想御手の所有者を保護する方向で風紀委員は話を進めていますの」

「そう、ですか……」

「?どうしたんですか佐天さん」

「あ、ううんなんでもない。初春のパンツが青のストライプで可愛いなーって」

「なんで分かったんですかあああ!?!」

顔を赤らめ大声を上げる初春にレストランにいた男性の皆様が赤くなっていたとかいいたか。

相変わらずですわね、とため息をつく白井とほう、となぜか興味深そうに佐天と初春を交互に見つめる木山。佐天はいつもの様子で笑っていたが、御坂だけは目を細めて佐天を見つめていた。

そのあと脳に関する話を色々聞き、四人は真剣にその話を聞いていた。幻想御手と関係あるかどうかと言われたら首を傾げるところだが、しかし木山が話す言葉一つ一つに興味湧き、思わず聞き入ってしまった。

そうしている内に、外の景色は茜色に染まっていた。

「お忙しい中色々教えていただきありがとうございます!」

「いや、こちらこそ教鞭を振るっていたことを思い出して楽しかったな」

「教師をなさっていたんですか?」

「むかし、ね」

そう言うと白衣を右手に抱えて背を向けて木山は去っていった。その背中が、妙に悲しく見えたのは気のせいだろうか。

ふうと一息ついて、白井と初春は二人の影がないことに気が付いた。

「…………お姉さま？」

「あれ、佐天さんもない…………」

二人を探しに行きたい白井と初春だったが、今日は帰って木山に渡すデータを揃えておかないといけないためその足を止めた。

白井は御坂に、初春は佐天にそれぞれ支部に戻るというメールを送って、二人は風紀委員としての任務に戻った。

明らかに様子がおかしかった。

質問の内容もそうだが、そのあとの彼女のあからさまな話題逸らし。そして一瞬見せ

る憂鬱そうな表情。

白井も初春も気づかなかつた。彼女はメイドとして訓練されている。普段から笑顔を絶やすことをないうように、自身の胸のうちを悟られないようにメイドは仮面を被ることが多い。

しかし御坂美琴はその変化に気が付いた。それは彼女がメイドとして未熟だった頃からの知り合いだった故のことかもしれない。

「(やっぱり佐天さんは……ッ!)」

彼女は走っていた。レストランから出た直後に姿を消した佐天を探して、紅く染まった街を隅から隅まで走っていく。メイド服という目立った姿をしているから一度視界に入ればすぐに分かるはずだ。

十分ぐらい経つただろうか。肩で息をし始め、自分の疲れを認識し――

――高架下で、メイド服の少女を見つけた。

御坂はすぐさまそこへ向かい、話しかける。

「……佐天さん」

その声に、驚いたように振り向いた佐天だったが、すぐさまいつもの笑顔を作つて対応する。

「どうしたんですか御坂さん。常盤台の学生寮は逆方向ですよ?」

「そんなの決まってるでしょ。佐天さんに聞きたいことがあったから」

「……何ですか？」

「幻想御手……持つてるでしょ？」

それを言った瞬間、わずかに佐天の眉が動いたのを御坂は見逃さなかった。

これでもうやく確信を得ることが出来た。どうして暗鬱そうな表情をしていたのか、どうして笑顔を取り繕うと努力したのか。

当たってほしくない予想が、的中してしまった。

「……どうして——」

そこまで言って御坂は言葉を詰まらせた。

佐天が幻想御手に手を出してしまう理由。そんなもの彼女の彼女の友達である御坂が分からないはずがない。

元々佐天は能力に憧れていた。家族にも能力者になるんだと自慢していた。しかし実際は無能力者で能力をその手で操ることが出来ない落ちこぼれ。それを御坂は知っていた。

「やっぱり、憧れって消えないんですよ」

喉から手が出るほど欲しかった能力を、それを無料で提供してくれるサービスがあったとしたら。

そんなもの考えるまでもなかった。

「ズルいつて言えばそうかもしれない。でも……それでもやっぱり」  
彼女が両手を前に出し、直後変化があった。

佐天の両手の上では数枚の小さな木葉が渦を描くように回っていたのだ。

「能力を使ってるんだって実感した時、とつても嬉しかったんですよ」

無能力者である佐天がこんな芸当出来るはずがない。もし可能だとすれば、それは――

「御坂さんや白井さんに比べれば、とても些細な力かもしれませんが……でも、やつと能力者になれたんだって、学園都市に來た意味があったんだって、思えたんですよ」

――幻想御手。

佐天のポケットから音楽プレーヤーがポトリと落ちた。ようやく御坂はその正体を理解し、そして自分の無力さに腹が立った。

何度も無能力者の不便さを聞いた。何度もその羨望の言葉を耳にした。何度も諦めない姿勢を目の当たりにした。御坂が自分の経験を教えたこともあった。実際に能力指導をした時もあった。御坂だけではない。白井や初春も己の能力発現のキツカケやコツなどを語ってくれた。佐天もそれを聞いて、何度もそれを試してみた。

それでもダメだった。

無能力者のままから全く成長する気配が見えず、その体に変化は見られなかった。

結果的にそれは佐天の能力の成長を促すものではなく、才能のなさを彼女の心に突き刺すものになってしまった。

心底嬉しそうに話す佐天に対して御坂は責めることが出来なかった。その笑顔は自分の手が救いの手となって彼女に与えるものだとずっと思っていたはずなのに。

何が超能力者だ。

何が常盤台の超電磁砲だ。

友達の笑顔を守れずに、そんなことを言う資格が本当にあるというのか。

「……」

色んな言葉が御坂の頭の中を駆け巡るがどれも遠回しに彼女を傷つけそうで、何も言葉にすることが出来なかった。

それからどのくらい経っただろうか。



数秒のことかもしれないし、数分経ったかもしれない。この静寂した空気の中で、佐天が口を開いた。

「そろそろ私行きますね。待たせてる人がいるので……」

ハツと、御坂が顔を上げる。その時垣間見えた佐天の表情が、何故か今にも泣きそうで。

「じゃあまた」

くるつとターンして佐天は御坂の元から離れていく。

——行かないで。

今何かを言わなければ、何かを伝えなくては、いずれ必ず後悔する。そう頭の中で分かっているながらその足を踏み出すことは出来なかった。

善意でしたことが彼女への悪意に変わったことへの罪がその手の行方を阻む。伸ばした手は虚空をさまよいその居場所を失い、次第に力を無くしたように手を下げた。

そんなはずじゃなかったのに。

こういう結末を望んでいたわけじゃないのに。

でも何もかもが彼女を傷つけそうで、結局踏みとどまることしか出来なかった。

謝りたいという罪悪感と、友達を傷つけたくないという恐怖心が、全ての選択肢を消していく。

最後に残ったのは、何もできなかつたという後悔だけ。誰もいなくなつた高架下で、常盤台の超電磁砲は力を無くしたように膝から崩れ落ちた。

陽が既に沈み切り、街を照らす白と黒く染まつた空のコントラストを適当に眺めながら少年は自分の寮へと帰っているところだつた。普段なら夕方頃には家に着いているのだが、今日は補習があつたので少し時間が伸びてしまった。あまり見ることはない学園都市を眺めながら少年は一人カバンを片手に歩いていく。

何事もなくいつもの帰り道を歩いているとき、高架下で一人の少女を見つけた。あんな落ち込んでいる姿を見なことがなかつたので少年は彼女に話しかける。

「よう。何やってんだ？」

「……」

少年の問いに彼女は答えない。普段は事あるごとに喧嘩を売ってくるくせに今の彼女は蹲ったまま立ち上がろうともしない。

流石の少年も不審に思い始めた。

「何があつたんだ？」

「……」

とは言つたものの少年と彼女の関係は大したものではない。知っているのは互いの名前と学校名だけ。連絡先も知らないぐらいの、友達とも呼べない知り合い程度の浅い関係。ましてや異性だ。そんな深刻なことを話してくれるとは思わなかつた。

せめて寮まで送つてやるか、と少年が思ったところで、彼女は唐突に口を開いた。

「……今日ね、友達を傷つけちゃつたのよ」

それはいつも聞いている声とは違い、今にも泣き出しそうなどとても弱々しい声だつた。

「自分ならあの子を救えるんだつて思つてたのに、私のやつたことが全部彼女を傷つけて……最低だよね」

少年は詳しい事情を知らない。彼女とその友達とどういう関係か、具体的に何があつてこうなつたのかも。

でも。

「お前は、あいつのことを大切に思ってるんだろ」

それでもわかることはある。彼女が苦しんでいることや、彼女がどれだけその友達を大切に思っていたことも。彼女の様子をみればハッキリわかる。

「俺はお前とその友達と何があつたかは知らない。でも——」

そう前置きした上で、ツンツン頭の少年は彼女にこう言った。

「——お前が友達のことを心の底から助けたいって思ったなら、その思いは絶対友達に伝わってるはずだ」

ようやく、彼女は顔を上げた。目に映つたのは何時も喧嘩を吹っ掛けて面倒くさそうにあしらおうとしている顔じゃなかった。自分の心を打ち抜くような、そんな眼差しをしていた。

「確かにずっと結果を出せばパーフェクトかもしれない。でも人間そういう生き物じゃないんだ。絶対どこかで失敗するんだ。その度にお前は謝って悔やんで考えたはずだ！誰かを救おうとしている姿は友達だつて見ていたはずだ！結果論なんかじゃない。それ以上のものをお前たちは築き上げてきたんだ！だつたらお前が友達にやってきたことは間違いなく本物だ。誠心誠意込めて謝れば、絶対許してくれる」

……普段から不思議な奴だとは思っていた。

自分の電撃の槍や必殺の超電磁砲さえ効かない、そのくせして無能力者と称する謎多い男。

まともな会話なんてしたことなかったのに、それでもコイツが言う言葉の一つ一つが自分の心を温めてくれた。

本当に、どうしてそこまで気にかけてくれるのか。そう聞きたかったが——やめておいた。最初に会った時も見知らぬ自分が不良に絡まれていると知って助けようとしてくれた。(その不良は自分が制裁したのだが)

多分コイツは元からそういう奴なのだ。困っている人がいたら助ける。見返りなんて求めず、それが赤の他人だったとしても。

「……本当、アンタってバカよね」

「よく言われるよ。今日も担任の先生に『バカだから補習でーす』って言われたからな……」

思わず吹き出してしまった。そんな彼女の様子が気にくわなかったのか、少年はムツとして。

「……せっかく人が励ましてあげたつてのになんだその反応は。お前は恩を仇で返すタイプなのか!?!」

「ごめんごめん。なんかアンタ見てたらうじうじ悩んでた私がバカらしくなって」

「そうかい。そりやあ良かったな」

「……うん」

「じゃあなビリビリ」

結局呆れた様子でツンツン頭の少年はこの場を去っていった。彼女——御坂美琴は心の中で礼を言つて、携帯を取り出した。

少年が言ったように自分の友達——佐天との関係はその程度で崩れるものではなかったはずだ。まだ知り合つて一ヶ月しか経っていないが、それでも仲の良さや信頼関係は、恐らく黒子よりも……

そこまで考えて御坂は佐天の携帯に電話を掛けた。今言わなくてはまた後悔しそうだったから。伝えなくてはいけない言葉を頭の中で何回も反芻させながら、コール音が鳴りやむのを待つ。

唐突にコール音が止んだ。それを耳にして、御坂は話しかける。

「あ、佐天さん？ちよつと話したいことがあるんだけど、今大丈夫？」

しかし、返ってきた言葉は御坂の予想を裏切るものだった。

『……お前がコイツの友達ってことでいいんだな？』

## 第六話　ズルをするから、罰が与えられるんですね

それは30分ほど前に遡る。

「あ、醤油切れてるの忘れてた……どうしよう、今から買いに行くのもアレだしなあ……」

1Kという狭い学生寮の一部屋には一組の男女がいた。だがそれは遊びに来たという仲睦まじい関係でも同棲という愛し合う関係でもなく、彼らはメイドと主人という日本では滅多にお目にかかることのない関係だ。

それはなんの冗談でもなく一時的な関係でもない正真正銘の主従関係。一部の人が発狂しそうなシチュエーションでも主人である一方通行にとつては迷惑極まりない行為だった。

彼女は上層部からの命令で派遣されたメイド、それも一方通行の意思など無関係に勝手に送り付けてきたのだ。彼は能力の関係で一人でいることが多いため、学園都市最強でもこういう時どうしていいか分からなくなるのだ。

「きやつー……あー、お皿割っちゃった……」

しかし最近これを受け入れている自分がいることも確かだ。今まで同じような毎日



を繰り返してきたせいで闇と全く無関係の人物と話すことが新鮮でいい暇つぶしになっているのかもしれない。

未だに上層部の思惑を読み取ることが出来ないが、少なくともこのメイド——佐天自身が『悪』だとは考えにくい。今までの行動から何か探りを入れるような仕草は見られないし、何かの準備を始めている気配もない。もし仮に彼女の言動全てが演技で元々は暗部で活動する人物だと判明したなら、一方通行は容赦はしない。闇に潜む者に情けをかける必要はない。

でも……そうあつてほしくない。

「あ、あれ？これ砂糖じゃん……塩と間違えちゃった……」

最近考えなくなっていた佐天暗部説がここにきて急に浮上したのは幻想御手のせいだ。一方通行が調べた限りではアレはともじやないが合法とは思えない。そもそも合法なら都市伝説になるはずがないし、一時間近くかけてやっと見つけた隠しページに置いておくわけがない。

恐らくこれは暗部に身を置くものが作ったものだろう。しかし彼が問題視しているのはそこではない。佐天がそれを持っていたことだ。これが自分の意思で手に入れたものか、誰かに頼まれて手に入れたのかで話が全然変わってくる。

その事について聞こうと思っていたのだが……

「ハア……」

どうも佐天の様子がおかしい。何時もならミスなく完璧にこなし一方通行をもてなす佐天が今日に限っては素人がやりそうなミスを連発し、彼女らしくないため息までついているのだ。

まるで心ここに有らずといった様子だ。表情も暗く落ち着きもない。中身がまるつきり入れ替わったと言われても納得できてしまうほど変わっていた。

その姿が、どうしてか目について。

「(……なんだ？俺は一体何が引つ掛かってんだ？)」

一方通行がよぎった謎の違和感。何時もの佐天と違うのは明らかだがそれだけではない。目に見えない何かが動いている、そんな予感が。

「(……気のせいかな)」

しかしその時一方通行は気づかなかった。いや、今の一方通行だからこそ気づかなかったと言うべきかもしれない。それに気づくのはもっと先のことになるなんて、思ってもみなかっただろう。

「そういえばさつき買ったやつ冷蔵庫に入れてなかったっけ」

佐天はエプロンを外して玄関近くに置いてある荷物の方へ向かう。それを一方通行は見届けて、一度大きく息を吐いた。

一方通行の根の暗さと佐天の底なしの明るさのギャップのせいかな佐天と一緒にいるとどうも調子が狂わされるのだ。何をしでかすか予想できない相手とほぼ毎日接するのは学園都市最強の能力者でも苦勞する。

だが。

玄関の方からドサツという何かが倒れたような音がしたのは本当に予想外だった。

「……ああ?」

ソファで寝転んでいた一方通行は気になって立ち上がり、音のした玄関の方へ向かう。そこにはスーパリーの袋から取り出された野菜やら肉やらいっぱいあったが、それ以上を引くものがあつた。

どうしてメイド姿の少女が倒れているのだろうか。

それはさつきまでいた少女ではなからうか。

「……オイ」

一方通行は何度もこの姿を見てきた。それはゴーグルをかけた制服を纏った少女だったがいとも情けはなかつた。与えられたオモチャを壊れるまで遊ぶのが彼のやり方。相手も命乞いはせずに死を受け入れるだけの機械。

何度も見てきたがゆえに、その手を動かすことは出来なかった。

助けるべきなのだろうが、今の自分にそんな資格があるのだろうか。

今まで四桁に及ぶ人を殺してきた。既に両手は汚れ切り、誰かに触れることすら許されないモノが、果たして『誰かを助ける』という行為をしても良いのだろうか。

どうして佐天が倒れたのかは分からない。だがこの様子からして簡単に起き上がることもないだろう。本来なら手を伸ばして安否を確認すべきだし、それでもヤバイと思ったら救急車を呼ぶべきだろう。

でも、彼が手を伸ばしてきたその行為は――

――と突然プルルルという機械質な音が突然聞こえた。それは佐天の身体の方から。恐らく佐天が持っている携帯電話なのだろう。ポケットから僅かに頭を出した携帯電話を見つけて、気まぐれでその携帯の画面を見た。

そこには、『御坂美琴』という文字。

「(コイツが言ってたもう一人の超能力者ってのは……)」

その苗字は耳にタコができるほど聞いた言葉だった。その彼女の顔と瓜二つの少女を嫌になるほど何度も見てきた。

でも彼女は、その瓜二つの少女のオリジナル。七人しかいない超能力者の第三位。そ

して、超能力者の中で唯一暗部に身を置かず光の人間として生きている希少な人間。

本当なら顔も合わせたくない声も聞きたくない彼だったが、でも佐天と同じ場所にいる彼女なら……

そう思い、電話を取った。

『あ、佐天さん？ちよつと話したいことがあるんだけど、今大丈夫？』

『……お前がコイツの友達ってことでいいんだな？』

『ツ!?!』

「急にコイツが倒れやがったんだが、お前何か知ってるか」

『佐天さんが倒れた!?!ってかアンタ誰よ！名前を名乗りなさい名前を!!佐天さんに何をしたの!?!』

「名前なんてどオだっついていいだろオが。ンなことよりコイツをどうすりゃいい？お友達ならそれぐらいの対処法ぐらい思いつけよ」

『……その前に確認させて。アンタが佐天さんを襲ったわけじゃないのね?』

「一応な」

『……多分それは幻想御手による副作用よ』

「副作用?」

一方通行は確かに幻想御手について調べたが、それはあくまで佐天が暗部の差し金で

それを持たされたか確認するため。隠しページにあるとはいえネットに流失しているのを確認してからはそれ以来幻想御手そのものに興味が湧かなくなり幻想御手について詳しく調べようとしなかったのだ。

だから幻想御手に副作用があるなど初めて聞いたのだ。

『今あらゆる病院に謎の昏睡状態に陥る患者が増えているのよ。で、その学生の一部に共通していたのが書庫に載っているレベルを上回る力を手にしていたこと。それでそのレベルを上げる装置っていうのが』

「幻想御手つーわけか」

『そうよ。今のところどんな薬を使っても改善の様子が見られてないらしいけど、アンタもその子を病院に連れて行って。佐天さんのお友達のお願いなんだから、それぐらい聞いてくれるわよね』

チツ、と舌打ちしながら一方通行は電話を切った。これ以上話すことはない。必要な情報と目的が得られたのだから彼女と仲良く会話する必要もない。

改めて一方通行は佐天の姿を見た。彼女は電話を出る前と出た後で一寸の狂いもなくそこに倒れている。どこか怪我したわけでもなく、誰かに倒されたわけでもなく。

必要な情報は得た。

目的もハッキリとしている。

後は一步踏み出すだけ。

彼が手を伸ばす人物には残酷な死が待っている。それが当たり前で、その生活を受け入れて、彼は人を極端に拒絶するようになった。

でも佐天と触れて今までの認識が変わり始めている。

それが今までの行為を清算するわけじゃないけれど。

彼の抱えている闇が消えるわけでもないけれど。

「(……クソツ、何なんだよ畜生が)」

彼は初めて、誰かを助けるために手を伸ばす。



「佐天さんが倒れた!?それは本当ですのお姉さま!」

『うん。今佐天さんの近くにいた人が病院に送ってくれたわ……』

その情報は御坂の携帯を通して風紀委員第一七七支部へと伝わっていた。傍にいる初春も深刻な面持ちで白井の方を見ている。

「……お姉さま、まさかとは思いますが」

『そのまさかよ。佐天さんは幻想御手を使ってた……』

「……」

『色々思うことはあると思う。でも今は幻想御手について手掛かりを見つかるしかない。そして佐天さんを助け出して、その思いをぶつけましょ』

自分でもなく初春でもなく、佐天と一番仲のいい御坂が一番悔やんでいるはずなのに、苦しいはずなのに、それでも御坂は前を向いていた。確かに幻想御手で昏睡状態に陥っている人たちを救出することが最優先事項。それを言葉で示したのは他ならぬ御坂だった。

「……分かりましたわ。私たちもやれることは全てします。お姉さまは——」

『私だけ大人しく寮に戻ってろ、なんて言わないわよね?』

それでも御坂は感情的だった。頭ではやることが分かかっていても助けたいという気持ちが無くなるわけではない。本来は警備員や風紀委員の管轄だ。しかし幾度となく



御坂は事件に首を突っ込み、その度に注意するも一向に治る気配がない。そんな御坂が佐天を助けるために大人しくしているはずがない。

白井は心の中でため息をつき、年上である御坂に指示を出す。

「わたくしたちは再び幻想御手の犯人について探しますわ。そこでお姉さまは佐天さんの幻想御手の回収をしてほしいんですの」

『幻想御手の？何でそんなことを……』

「私たちには分からなくても、木山先生なら」

『なるほど、分かったわ』

そういつてプツリと強引に電話を切った。

「（……まあ、もしあそこでお姉さまが素直に帰っていたら幻滅していたでしょうけど）」  
ブラックアウトした携帯電話の画面には僅かに頬を緩めている少女の姿があった。

「初春、一からデータを見直しますわよ」

「……はい！」

少しずつ、事件は進んでいく。

既に陽は沈み、夜の静けさが残るこの学園都市でもこの日は違った。

ある少年はシスターを助けるために担任の先生の家を訪ねていた。

ある少女たちは事件の真相を暴くためにパソコンと資料に目を通していった。

ある少女は寮の門限が過ぎているのにも関わらず病院へと向かっていた。

ある少年は自分の罪をはっきりと認識しながらも倒れた少女に救いの手を伸ばした。

そして、ある女性は机の上に置いてある教師をしていた頃の写真を見ながら唇を噛み締めた。

それぞれの思惑が交差する中、男にも女にも子供にも老人にも聖人にも囚人にも見え

る『人間』は、生命維持装置のビーカーに逆さまに浮かびながら、不敵な笑みを浮かべていた。

## 第七話 多分、色んな人に迷惑をかけたと思います

お嬢様が通うこの常盤台中学では華やかという言葉がピッタリと断言できるほど生徒は美しく煌いている。

それはこの学校の特性ゆえのことだろう。レベル3以上の女子中学生しか通うことが許されないこの学校では派閥という小さなものはあれど生徒一人一人が平穩に過ごし、賢くまじめで殆どの学生には笑顔が絶えない。先生も問題児がいないので苦勞をせずに過ごすことが出来る。

しかし、今日は違った。

皆の表情は何故か暗い。休み時間にも関わらずまるでお通夜のような空気がクラスに漂っている。それは教室に入ってくる先生にも影響を及ぼしていた。教室に入るなり近くの生徒に『どうしたの?』と聞く始末である。

その内容は至ってシンプルで、かつ即座に理解出来ないものだった。別に誰かが亡くなったとか、事故や病気で入院しているとかそんなことではない。だがこれは常盤台中学だからこそ起こったことなのかもしれない。

曰く。

『今日の御坂様は様子がおかしい』

最初その言葉を聞いた時自分の耳を疑った。そちらに視線をやっても御坂はただボーっと窓の外を眺めるだけで特に変わった様子は見られない。その時先生は首を傾げることに出来なかつたが、それはチャイムが鳴つてすぐに理解できた。

ペンを忘れ、予習をしてくるのも忘れ、当ててみても話を聞いていないという始末。

御坂は常盤台中学の中でも特に有名だ。能力が宿つた当初はレベル1だったが、地道な努力を重ね、今では七人しかいないレベル5の第三位まで上りつめたのだ。常盤台中学に在る者なら誰もが知つてゐる伝説。自分たちがレベルを上げる苦悩を知つてゐるからこそ計り知れない努力した御坂を尊敬してゐる生徒は多い。

努力家の御坂を知つてゐるからこそ、こんなミスを犯す御坂が信じられなかつた。まるで中身がごっそり入れ替わつてしまつたような錯覚。誰もが心配の眼差しを向け、でも彼女がレベル5が故に話しかけることが出来ない。常盤台中学の殆どがレベル4とレベル3の能力者。レベル5に在る御坂とは住む次元が違うし、今の御坂をそうさせてゐる要因を知つたところで、自分たちにアドバイスが出来るとも思えない。

恐らくそれが可能な人物は、御坂と同じ舞台に立つ人間。

例えば。

「はあい御坂さん」

この学校に通うもう一人のレベル5の能力者とか。

「今日はえらく不機嫌じゃない。そんな顔じゃあお嫁に行けないんだゾ☆」

学園都市に七人しかいないレベル5の第五位、心理掌握（メンタルアウト）、食蜂操祈。星の入った瞳、背に伸びるほどの長い金髪、長身痩躯、巨乳、そして派閥の一員から『女王』と呼ばれている御坂とは何もかもが対照的なお嬢様。

普段滅多に顔を合わせることはない二人が、同じ教室で会話を交わしていた。

息を飲む音が聞こえた。どうしようもない緊張感が教室を支配する。口を動かすことも瞬きすることすら許されないようなそんな空気。彼女たちはレベル5だ。それは一人で軍隊と戦えるほどの力を有していることの証明でもある。そんな彼女たちが、そして食蜂が喧嘩を売るように話しかけたこと自体が、生徒たちを怖がらせている。もし二人が本気で真正面から戦ったら、なんて思いたくないがその可能性が現在否定できない以上、彼女たちはただ恐怖に押しつぶされるしかなかった。

「……」

しかし御坂から返事はない。普段なら誰に対しても笑顔で優しく返してくれる御坂のこの対応をどう読み取るべきなのか。様々な憶測が彼女たちの頭の中で繰り広げられる中、食蜂はお構いなしに話を続ける。

「大体御坂さんっていつも一人でいるわよねえ。もしかしてお友達がないのかしらあ？」

「……」

「ルームメイトだった同級生には逃げられちゃうしい、それって御坂さんの性格に問題があるのかもしれないわねえ」

「……」

「……」ここまで無視を貫かれると流石に辛いんだゾ」

しかし御坂はハアとため息をついて変わらぬ窓の外を眺めている。それをジッと見つめて、ようやく食蜂は御坂の異変に気が付いた。「ふうくん。そういうつもりなんだあ」と適当な言葉を放ちながら食蜂はカバンの中からリモコンを取り出し、

「壊れない程度に、御坂の頭にゴンとぶつけた。」

小さな鈍い音が響き、ようやく御坂がこちらを向いた。

「つたあ！誰よいきなり殴……なんだ食蜂か」

「なんだとは酷いわあ。さっきからずっと話しかけてたのにい」

「……え？本当？」

「何だか心ここに在らずって状態だったけどお」

「……ゴメン」

「……み、御坂さんが謝るなんて……本当にどこか頭を打ってツ!!」

「ああもういちいちムカつくわねアンタは!!」

……これを見てほっこりしたのは何故だろうか。生徒たちは安堵の息を吐きながら友人と会話を始める。

それを横目で見ながら、御坂は大きく息を吐く。

「まあそうね。私らしくないのは確かだったわ」

「ま、どうせ幻想御手のことでしょうけど」

「……なんでアンタがそれを知ってるのよ」

「ちよつと知り合いから。つまるところ御坂さんのお友達がその被害者つてところかしらあ?」

「食蜂は幻想御手の犯人のことについて知ってるの?」

「知るわけないでしょお。昨日知ったんだからあ」

「じゃあアンタは何しに来たのよ」

と御坂が聞くと食蜂はうーんと困ったように視線を泳がせた。

「?」

「とにかく!!御坂さんはまず自分に焦点を当ててみてはどうかしらあ!!」

若干頬を赤らめて食蜂にしては珍しく怒ったように声を荒げる。ますます御坂は食



蜂の行動に疑問を抱くことになった。

「何よ突然」

「だーかーらーあ」

呆れたように食蜂はリモコンが入っていた小さなカバンの中に手を突っ込む。出てきたのは小さな手鏡だった。食蜂はそれを御坂に向けて、そこでようやく御坂は食蜂の言いたいことを理解した。

彼女の髪はやつれたようにとところどころ跳ね上がっており、制服のカッターシャツはボタンを掛け違えていた。

「……」

「灯台下暗しって言葉知ってるかしらあ？」

「ああ、うん。こりゃあ駄目だわ」

「お友達が心配なのは分からなくはないけどお、目を覚ました時に貴方のそんな姿を見たら……きつと悲しむゾ☆」

「……まさか食蜂にそんなことを言われる日がやってくるなんてね」

「今のはちよつと聞き捨てならないゾ」

「じゃあ私早退するから先生に風邪で早退したって言つといてね」

「あーそ……つてえええ!!？」

眼玉が飛び出そうな勢いで驚く食蜂を差し置いて御坂は生徒の人混みを潜り抜けて、雲一つない空のような清々しきで教室を後にした。

「……あんな元気な病人いないわよおおお！」

今度会ったら絶対なんか仕返ししてやる。そう心に決めた食蜂であった。

—  
—  
—  
—

風紀委員第一七七支部では傷だらけの白井を初春が手当てをしていた。

「ちよつと染みますよ〜」

「ぐう……！」

幻想御手による力を得た能力者が日に日に増えていき、その対処に追われる白井は疲労の蓄積もあり能力者達を無傷で倒すことが出来なくなっていたのだ。

もちろん白井が殆どの能力者に対して遅れを取るなどないのだが、それも数が増えれば話は変わってくる。

「……大変です、ね白井さんも」

「初春、貴方がそれを言いますか……でもとりあえず私たちがすべきことは三つ。幻想御手の拡散阻止と、昏睡した使用者の回復、そして幻想御手開発者の検挙。これを開発し、ネットに広めた何者かを、必ず見つけ出して目論見を吐かせてやりますわ」

言いながら二人の視線はある電子機器に向いていた。それは佐天が持つていた音楽プレーヤー。幻想御手が入っているそれはこの開発者を見つけるために限りなく重要なモノだ。

これを脳の専門家である木山に見てもらえば、もしかしたら。

「本当は御坂さんに手当てしてもらいたくないんじゃないんですか？」

「お姉さまにこんな姿見せられませんか」

「大丈夫ですよ。誰も見たくないですから」

「あーん？」

裸の身体に包帯を巻かれた状態の白井が初春の首を絞めるように前後に揺らす。

そんな時だった。

「黒子、初春さん！私に何かできることあ——」

ゴンと、突然レポートした初春が御坂の頭上に激突した。二人は成すすべなくそのまま激痛に襲われて倒れこむ。そして白井はその間にカッターシャツを急いで羽織つて、

「い、いきげんようお姉さま」

しかしそこには伸びている御坂と初春がいたとかいないとか。

「あんた達学校はどうしたのよ？」

御坂はぶつけられたところをさすりながら白井達に問うた。

「私達は緊急事態ということで風紀委員の今日の授業は免除されました。お姉さまこそ昼前で授業がありますのにどうなさ……まさかお姉さま」

「べ、別にいいでしょ緊急事態なんだから！」

む、と白井はムキになり何か反論しようとした。しかし爆弾魔の事件もあつて今の風紀委員は人手不足。今は猫の手も借りたい状況で御坂が力を貸してくれるなら、そしてレベル5の頭脳をもつてすれば犯人特定できる手掛かりを見つけてくれるかもしれない。

「……今回だけですわよお姉さま」

「よっしゃー！じゃあ私何すればいい？」

クリスマスに欲しかったプレゼントをもらった子供のような無邪気さで喜ぶ御坂。それに対して白井は。

「まずはその寝ぐせを直してくださいな」

「……あつ」

食蜂に言われたこと、直接ここに来たからそういえばまだ直してなかったなと気づいた御坂であった。

「木山先生の話では、短期間に大量の電気的情報を脳に入力する為の学習装置（テストメント）と言う特殊な装置もあるそうです。でも、それは視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触

覚の五感全てに働きかけるもので」

「そつか。幻想御手は聴覚作用だけだもんね」

寝ぐせを直し制服を着なおした御坂は早速今の現状を整理する。初春がお茶を入れている間に白井から語られた内容は幻想御手に繋がりそうで繋がないものだった。

いくらレベル5といってもそれは所詮広く浅くの知識しかない。こういう特定の分野に対しては専門家に大きく劣る。やはりここは協力してくれた木山先生に頼るしかないのだろうか。

「お茶入りましたよー」

「ありがとう初春さん」

出された湯？を手に取って緑茶を口に流し込む。淹れたてなので舌が火傷しそうな熱さだったがコーヒープレイクにはこれぐらいが丁度いい。

お茶を呑んで一度落ち着いて、ふと気づいたことがあった。

「……曲自体に五感に働きかける作用は無いの？」

「どういふことですか？」

「ほら、かき氷の時の」

「さささ佐天さんとか間接的なキッスのことをななななんで今思いだし」

「いや違うから」

こんな時でさえ食べ比べできないことを思い出した白井に御坂は思わずため息をつく。彼女が言いたいことはもちろんそんなことではない。

「共感性性よ」

「共感性性って、確か風鈴の音を聞くと涼しく感じるとかの……あの共感性性ですの？」

「そうよ。一つの刺激で複数の感覚を得ること」

「……それを使えば学習装置（テストメント）と同じ効果が！」

「かもしれないわね。初春さん！」

「はい！早速電話をかけています！」

もちろん相手は木山春生だ。脳科学者である彼女であればこれをヒントに幻想御手の解決になる手掛かりを見つけてくれるかもしれない。かなり任せきりのところもあるが、詳しいことが分からない以上仕方がない。

『なるほど共感性性か。それは見落としていたな』

「はい。一度その線で調査をしてほしいんですけど」

『ああ……そういうことなら、ツリーダイアグラムの許可も下りるだろ』

「ツリーダイアグラムですか!?!あのスーパーコンピュータの!?!」

『ああ。結果が出たら報告しよう』

「あ、あの、今からそっちに向かってもいいですか!?!」

『……ああ、構わんよ』

「ありがとうございます！」

とツリーダイアグラムを使うところを見る事が可能になったため興奮が冷めない初春は高揚しながら電話を切った。それと同時に、初春の両耳がむぎゅーと引つ張られる。

「うーいーはーるー？ 貴方こんな非常事態だというのに一体どこへ行こうと言うのですの？」

「い、痛いです白井さーん！」

白井はフンと吐き捨てながら両耳から手を離し、

「まあいいですわ。こういう時こそ電話越しではなく直接会ってお話をした方が案外スムーズに解決できるかもしれませんし」

「白井さん！」

「だから早くお行きなさい。木山先生もお忙しいんですから一秒も無駄にしてはいけませんよ」

「はいー！」

「……………イヒヒ、これでお姉さまとふた」

ゴーン。



「くーろーこー？アンタこんな非常事態だというのに一体何をするつもり？」

「い、痛いですわお姉さま……」

アハハ、と苦笑いしながら初春はテキパキと荷物を纏める。

「じゃあ行つてきます」

「行つてらっしゃい！」

「が、頑張つてくださいですの……」

御坂が元氣よく、白井が殴られた箇所をさすりながら弱々しい声で呟いたのを聞いて、初春は木山春生のところへと向かつていった。

「さて、と」

「初春も行つたところですし」

「まさか私に何かするとは言わないわよね」

「普段なら愛を育んでいたでしょうけど、今はそんな暇はありませんし」

普段ならしてたのかよ、と怪訝な顔を浮かべる御坂を無視して初春のパソコンの画面を見る。

「今この瞬間も幻想御手を使った能力者の被害が相次いでいますの。風紀委員として見過ごせませんわ」

「じゃあ私も行——」

「ダメよ御坂さん」

と、忠告してきたのは先ほどまでパトロールに行っていた固法美偉。御坂達よりも年上の高校生でこの一七七支部のリーダー的存在。彼女は扉にもたれかかるようにして腕を組んでいた。

「そこから先は風紀委員の仕事。一般人は大人しくしてなさい」

「……でも」

「友達が心配なのは分からなくもないけど、ね？」

「……黒子はいいつて言ったのに」

「あら白井さん面白い冗談を言うのね」

「こ、固法先輩……これには深いいわげが」

「じゃあそれも含めてタップリ聞いわね」

彼女がレベル3にも関わらず風紀委員第一七七支部でリーダー的な存在になっているのが何となくわかった気がした。

さすがの御坂もその威圧感には逆らえず。

「……じ、じゃあ、私は佐天さんの様子見てくる」

「そ、それなら私も。初春は朝に行つたみたいですけど」

と言つて逃げるように二人は外に出た。

それは、本当に突然のことだった。

佐天が入院している病院の近くまで黒子とやってきた御坂は迷うことなく病院の入り口へと向かった。

その時、病院から出てくる男と視線があった。

「ッ!？」

その男の目を見ただけで、何故かこう思ってしまった。

殺される。

一度も会ったこともない男だった。白髪で赤眼という珍しいアルビノ。スキルアウトと思ってしまうほどに目つきも悪かったがそれでも普通こんなことにはならないはずだ。ましてや自分は学園都市レベル5の第三位。よほどの相手じゃないと負けるはずがない。

その緊張感は、男が通り過ぎるまで続いた。後ろを振り返り、見えなくなっただのを確

認して、大きく息を吐いた。

「どうかありませんでしたかお姉さま？」

白井の方は何も感じなかつたらしい。御坂はすぐに笑顔を取り繕つて、

「ううん。なんでもない」

駆け足で白井の背中を追つた。どうしようもない違和感を抱えながら。

病室には健やかに眠っている佐天がいた。

身体の健康上は何も問題がない謎の昏睡状態。もちろん原因は幻想御手だとは分かつているのだがその対処法が全く分からない。いつも笑顔だった彼女が目を瞑つて動かない様子を、ただ眺めることしか出来ない無力さを感じながら、二人は病室を後にする。

廊下を歩いてしていると、背後から突然声がした。

「君たち、ちよつといいかな？」

白衣を纏っているのでこの病院に勤める医者だとすぐに分かった。しかし意外な反

応をした人物が約一名。

「リアルゲコ太！」

「お姉さま違いますの」

……そう見えなくてもない彼は冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）。どんな病気・負傷であつても最後まで患者を見捨てず、あらゆる手段を用いて治療してしまふという外科医のスペシャリストだ。

その医者と呼ばれて連れて行かれたのは彼が独自に研究を行っている部屋の一室。そこに置いてあるパソコンには音の波が映し出されていた。

「これは昏睡状態の患者たちの脳波だ」

マウスをずらすと他にも色んな人の脳波が映し出されていく。素人の御坂と白井にはこれの違いが全く分からない。

「どれも同じに見えますわね」

「そう。これらの波形はほぼ全て同じなんだね？」

「どういうことですか？」

「脳波は指紋と同じで個人個人で違うから波形が同じなんてありえない。こんなことをしていたら人体に影響が出るだろうね？」

「……じゃあみんなが植物状態みたいになっているのはこれが原因つてわけか」

「一体何のために……」

「それは君たちの仕事だろう？でもまあ、偶然にも発見してしまったんだね？」  
と冥土帰しは御坂達の方を向き直し、

「幻想御手の被害者と同じ脳波を持つ人物……それがこの人なんだね？」

映っていたのは、御坂と協力関係にあり、先ほど初春が会いに行った人物。

「木山先生!？」

果たして偶然か必然か。食蜂が言っていた言葉がそれを的確に表していた。

## 第八話 でも、それ以上に得るものがありました

『幻想御手の被害者と同じ脳波を持つ人物……それがこの人なんだね?』

冥土帰しから言われた言葉が頭の中を反芻する。それにただただ沈黙するしかなかった。もしかしたらこの医者は何もかも見透かした上でこう言っているのかもしれない。

『……何を迷うことがある?これが君の望んだことじゃないのかい?』

これは贖罪でも懺悔でも何でも無い、関わる必要のない案件のはずだ。しかしどうして反論出来ない?語彙力がないわけではない。いや、反論すべき言葉は全て文章になつて出来上がっている。なのに、喉まで湧き上がってきたそれを、切り出すことが出来ない。

『君がここに来た、それが何よりの証拠なんだね?』

そんなことはない。今日ここに寄つたのはたまたま偶然通りかかったからにすぎない。そのついでに、暇つぶし程度に少し様子を見に来ただけ。

『もう少し素直になつたらどうだい？君は答えを得ているはずだよ？』

……俺の事を全く知らないお前が、一体俺の何を知つて言ふんだ？

『いいや。まあこれも人から頼まれたことだけどね？』

—

—

—

—

「うーむ」

病院の一室では、腕を組んで唸っているメイド姿の女性がいた。

彼女は土御門舞夏。佐天と同じ繚乱家政女学校に通う中学一年生。寮も佐天と相部屋で同級生の中では一番仲がいい。そんな彼女が倒れたと聞いて仕事を放り出してまで駆けつけたのだが……

何でこんなに気持ちよさそうに寝ているのだろうか。



加えて医者と言うには彼女は健康上はなんの問題もない。どうして倒れたのか分からないという始末。未確認ウイルスに侵されたわけでもまだ見ぬ病気にかかったわけでもないらしい。

そこから導き出される結論は……

「働きすぎかー。どんな仕事をしているのかは知らんが主を支えるのにお前が倒れてどうするんだー？」

舞夏は知っている。佐天がどれだけの努力をしているかを。才能の無さを認めつつも少しでもエリートたちについていこうとしている姿。相部屋ゆえに接する機会も多く、陰で努力している姿を何度も見てきた。

「頑張りすぎだー、と舞夏は佐天の顔を見ながらため息をつく。しかしその表情は僅かに緩んでいた。

すると突然。

ドタドタ、と病室の外から誰かが走っていく足音が聞こえた。

「ん？」

病院内を走るとはどんな教育を受けたんだー？と適当なことを考えながら舞夏は病

室のドアを開けて外の様子を確認する。

そこには既に誰もいなかったが、遠くの方から声が反射して舞夏の耳にも届いてきた。

『お姉さまー！待ってくださいですの!!』

『初春さんが木山春生に誘拐されたのに呑気な事言つてられないわよ!』

この声と口癖でその声の主が誰なのか察することが出来た。

「むむ、御坂と白井かー」

あの二人ならやりかねない、というか実際そういう行動を起こしているんだよなー、と舞夏は心の中で呟きながらそつとドアを閉じた。

紅茶のカップをテーブルの上に置く音が聞こえた。

少女はそのカップを手に取り口に運ぶ。厳選された紅茶の葉と洗練された淹れ方が

より一層旨味を引き出ししている。それを堪能しながら少女は隣にいる少女に問うた。

「それで、結局アレはなんだったのかしらあ？」

「あの人からの連絡でしたから。もうすぐ解決するかと」

「あの女からねえ」

今日、少女——食蜂が御坂に話しかけたのは偶然でも単なる気まぐれでもなかった。そうして欲しいという依頼が食蜂の『側近』である少女——縦ロールを通じて耳に入ってきたからだ。

本来なら無視するはずの案件。正直どうでもいいと蹴散らすはずだった食蜂がわざわざ依頼を受けたのはある書類を目に通してしまったからだ。今も紅茶のカップの横に置かれている一枚の資料。そこに書かれていたモノを見て、食蜂は興味が湧いたのだ。

名前は佐天涙子。どこにでもいる無能力者。

メイドということを除けばごく普通の中学生。過去に何かがあったとか秘めたる力を持つているとかそんなわけでもない。両親も至って普通。強いて言うならレベル5である御坂美琴と親しい友達だということか。

どこにでもいそうな彼女をあの女が特別気にかけていたことが、食蜂の興味を引くキツカケになった。

「(佐天涙子……無能力者でありながら御坂さんやあの女を虜にする程の持ち主)」

資料には小学校時代の三つ編みの佐天の写真が印刷されていた。その幼さは普通の小学生そのもの。

故に、食蜂はこう思う。

「楽しみだわあ、貴方に会うのが」

—  
—  
—  
—

子供は嫌いだ。

デリカシーがない。

失礼だし、

悪戯するし、

論理的じゃないし、

馴れ馴れしいしすぐになついてくる。

子供は、嫌いだ。

子供は……………

「見られた……………のか」

既に身体はボロボロになり、立つのもままならない程になってしまった。一万人の脳をネットワークと言う名のシナプスで繋いだシステムはいわば1つの巨大な脳。それを使い多重能力者として無理矢理昇華させた。それでもレベル5の御坂には勝てなかった。それは本当の意味で立ち止まってしまふことを意味する。今までの後悔が、悲しみが、そのために積み上げてきた努力が、全て消える。

AIM拡散力場を制御する実験だと称されたそれは暴走能力の法則解析用誘爆実験だった。

幼い彼女たちをモルモットにされた。アンチスキルにも申請した。それでも彼らは動かなかつた。子供を守ると銘打っておきながら、子供を救おうとしなかつた。

それでも。

いや、だからこそ。

諦めることはしない。

立ち止まることは出来ない。

目の前の敵は全て薙ぎ払う。

だから、静かに心の中で誓った。

「あの子達を救う為なら私は何だってする。この街の全てを敵に回しても止める訳には  
いかないんだあ！」

その時だった。突然木山が頭を抱えて苦しみだした。

「ち、ちよつと！」

「ネットワークが、暴走……!?こ、これは……」

周りに乱雑に散らばっている瓦礫の欠片などもせすその場に倒れこむ。思わず御坂も駆け寄り木山の状態を確認する。すると木山の頭の中から青白い何かが出て

きた。それは徐々に肥大していき、オレンジ色の膜で覆われて地から浮いた状態で丸まっていた。

その姿はまるで。

「……胎児？」

胎児のようなそれは、顔を上げてギョロリと御坂を捉えると、

金きり音のような甲高い咆哮を響かせた。



学園都市は才能に依存した街だ。才能によって能力のレベルが決まり、奨学金が決まり、立場が決まり、実力が決まり、人生が決まる。どれだけ努力しても、どれだけあがいても、才能という暴力には勝てない。自分たちが十時間かけてやることを才能のある

やつらは十分でやってしまう。

報われない。

あそこに行きたいと叫んでも行けなかったり、あれを買いたいと言っても自分の奨学金では絶対買おうことが出来ない。しかし高能力者たちはそれをいとも簡単に手にしてしまう。コツコツ貯金したはずなのに、アイツはカードで一括払いなどということはこの街では日常茶飯事。能力だけではない。生活面、学力でさえも彼らとは天と地の差が生まれる。

評価されない。

諦めたくなかった。友達が順調にレベルが上がって、能力の応用の幅が増え、でも負けたくないから必死にあがいた。友達だと思っていた。ライバルだと思っていた。しかしソイツは自分が一向に進化しないことに気づいた途端関わってこなくなつた。友人関係さえも、能力で決まってしまった。

だったら、その努力に果たして意味はあつたのだろうか。



それは、肥大化した胎児——AIMバーストから聞こえてきた幻想御手の被害者の声だった。

能力で全てが決まるこの街では、どうしても能力の格差が生まれてしまう。そのコンプレックスが、妬みが、恨みが、御坂の耳に届いてくる。

ああ、と。

御坂は心にストンと落ちる感覚を覚えた。

ずっと後悔していた。佐天が幻想御手を使った時、その言葉が出なかつたことを。でもそれは、その言葉の本当の意味を理解していなかつたからだ。だからだ。だからこそ励まされても、大丈夫だと言われてもずっと腑に落ちなかつたのだ。

御坂は泣きそうになりながら、今までの愚かさを感じながら、

それでも目を背けずに、しっかりと前を向いて、

「ごめんね……」

呟くようにAIMバーストに言った。

その言葉の意味を正しく理解できているかは分からないが、それに反応するようにAIMバーストは大きな咆哮を上げた。

それこそ、泣き叫ぶように。

「気づいてあげられなくて」

A I Mバーストから氷塊が放たれるがそれを砂鉄を持ち上げて相殺する。

「頑張りたかったんだよね。何の力も無い自分が嫌で、でも、どうしても憧れは捨てられなくて……」

その言葉はレベル5である彼女に言う資格はないかもしれない。努力もあつたがそれに見合う才能があつたことは確かだ。

才能がある者が勝手なことを言うな、と思うかもしれない。

自分たちの気持ちなんて分からないくせに、と非難するかもしれない。

それでも御坂は言う。

「うん、でもさ……だったらもう1度頑張ってみよ。こんなところでよくよしてないで……」

コインを上空に弾き飛ばし、ありつたけの大声で、ハッキリと、その言葉を口にする。

「嘘つかないで、もう一度!」

彼女の代名詞、超電磁砲が勢いよく発射された。それは肥大化したA I Mバーストの身体を貫通し、中から飛び出た赤い三角柱の核を粉碎する。

核を失ったAIMバーストは内側から空気中に溶けるようにして消えていった。

ボロボロになった木山が。

治療プログラムを流した初春が。

身体を張って守った警備員が。

それを見届けていた。

二度とこんな悲劇を起こさないように。

しっかりと目に焼き付けるように。

「……アレ？」

と初春が突然高速道路の方を向いた。そこから百メートルほど先に、誰かがいた気がしたのだ。

「どうしたじゃんよ」

警備員である黄泉川が初春の方を向いて問いてくる。一瞬黄泉川の方を向き、もう一度そちらを向くとそこには誰もいなかった。

「あ、いえ気のせいみたいです」

そりやそうだ。ここは第七学区から遠く離れた場所だ。そんなところに一般人が来るはずがないのだ。

そう。

白髪の男がいたのは、恐らく気のせいだったのだ。

そう結論づけて、初春は御坂の下へと向かった。

—  
—  
—  
—

とある病院の屋上では病衣を纏った少女が夕焼けに照らされながら静かに俯いた。

手のひらに意識を集中させても何も変化は得られなかった。

「(そっか、私……)」

「何か能力が無くなって不満そうだなー」

そういったのは隣で一緒に夕焼けを見ている土御門舞夏だった。彼女は自分が目を覚ました時にそばにいてくれた友人。その時に自分が倒れた詳細を彼女に全て話した

のだ。舞夏はそんな佐天を非難することはなかった。彼女は何も言うわけでもなく屋上に付いてきてくれた。

それに感謝しながら、佐天は嬉しいような悲しいような微妙な笑みを浮かべながら答えた。

「そうだね。全く未練がないと言えば嘘になるけど、でも……」

でもどこか心が晴れたように見えるのも確かだ。舞夏はそれを見てどこか嬉しそうに微笑んだ。舞夏も佐天を心配していたからこそ出た笑み。

あの教訓を生かして前に進むうとしている。それが舞夏に伝わった証拠。

暫く夕焼けを眺めていると屋上のドアが壊れそうな勢いで開かれた。

そこから現れた少女が一直線に佐天に向かい、そのまま抱き着いた。

「ゴメンね、気づいてあげられなくて……」

「……私の方こそ、つまらない物に拘って、内緒でズルして……御坂さんをこんな目にさせてしまつて……」

「そんな事……」

「私ももう少しで能力なんかよりずっと大切なものを無くすところでした。だから……」

佐天はゆっくりと離れ、ボロボロの御坂に目を合わせて、とつびきりの笑顔でこう言った。

「ありがとうございます！美琴さん！」

「これにて一件落着ですわね」

そんな二人の様子を、屋上のドア近くで眺めていた白井は安心したように言葉を漏らした。

「はい。良かったです」

白井の隣にいる初春も、二人の姿を見ながら小さく呟いた。

でもその会話を聞いて、初春はあることに気が付いた。

『わわ、美琴さんこんなに怪我してるじゃないですか！本当にすみません……』

『良いわよ。何時もの涙子がちゃんど戻ってきてくれたから』

お互いの呼び方が少し変わっている、というか下の名前で呼び合う仲になったというか……なんか前から仲がいいのは知っていたけど一層仲が深まってないか？

それを見て、初春は隣にいる白井にポツリと言った。

「白井さん、佐天さんに一歩リードされてますよ?」

「ななな何を突然そんなことはありませんわ私はお姉さまの唯一無二のパートナーでありもちろん佐天さんとお姉さまの仲は承知の上ですがお互いまだ苗字で呼び合う仲であり下の名前で呼ばれる尚且つお姉さまのルームメイトである私がささささ佐天さんに負けるなどあるはずがな」

「お、落ち着いてください白井さん!」

「そうだぞ白井。もう二人は下の名前で呼び合う仲だぞー」

「あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ!!まさかこのままでは佐天さんとお姉さまがゴールインして私と離れ離れになっていやそんなことはありませんわまだ取り返しが付きませすわしっかりするのよ黒子自信がないなら取り戻すまで不満があるなら吹き飛ばすまでそうですわ私だけのアドバンテージ空間移動を以てすればお姉さまとの親睦は深まりよってお姉さまは私を選んでおふえへおはへひあほおふほほ」

その後。

空間移動を使ってお姉さまに抱き着いた黒子は見事に鉄拳制裁をくらったのであった。

## 第九話 大切な友達に気付かされました

あの事件から一週間の月日が経った。

治療プログラムを流し、幻想御手の鎖から解き放たれた被害者達は次々と目を覚ましていった。死亡者はおろか誰一人として後遺症を患うことなく、一週間後にはほぼ全員が退院していた。

もちろん幻想御手で手に入った、あるいは上昇した能力は元通りになった。だが、中には幻想御手の影響で一時的に高レベルの能力を使った経験を活かして、幻想御手無しで能力が上がった人もいるらしい。

あの事件は良くも悪くも人々の生活に影響を与えていた。

それは彼女も例外ではない。

「じゃあこんなのはどうかな？」

「また涙子の都市伝説話かー？なんかもう飽きてきたぞー」

「その名も『呪いのメイド服』」

「むむ？..」



繚乱家政女学校は道路のガム剥がしから各国の首脳会議まで、あらゆる局面で主人を補佐することの出来るスペシャリスト育成を目指しているメイド養育施設。もちろんそこに通う学生の殆どはメイドに対して誇りを持っており、先生もメイドの育成をするのに生徒を甘やかしたり大目に見るなど適当なことはいない。

そんな学校で育てられた生徒は、メイドのプライドというのを持ち合わせ、互いに切磋琢磨していく。

寮が二人で一つの部屋を共有するのもそのためだ。

時に仲間として。

時にライバルとして。

そして彼女たちは繚乱家政女学校が理想とするメイドに育っていく。

……だというのに。

「そのメイド服は一度着たら二度と脱げなくなる呪いのメイド服……」

「……ッ!!?」

「しかしその服がピッタリな少女は一部の男性にモテモテになるのです……」

「ま、まさか……兄貴が言っていた伝説のメイド服って……」

「ええ、恐らくこの事です!」

この子たちは一体何をやっているのだろうか。向上心の欠片も見当たらない彼女た

ちを先生が見たらなんと思うだろうか。

舞夏は一年生の中でもトップの成績を収めている。上位二十位以内に入れば実施研修の枠を獲得できる学内一斉テストでも舞夏は十四位だ。一年の中では間違いなくエリートに入る人材。佐天も最初こそ酷い成績だったが、最近はかなりいい成績を出しているのだ。

もちろん先生方はこの二人にとても期待している。今後どんな素晴らしいメイドに成長するのか、きつとわが子の成長よりも楽しみにしていることだろう。

「兄貴は一体私に何をするつもりなんだー!?!」

「つていうか舞夏のお兄さんつてどんな人よ。脱げないメイド服着せるとかどんな趣味してんのよ」

「いいや待て。待つんだ私。実はメイド服を集めるのが趣味なだけかもしれない。そうだ、兄貴ならありえ」

「ちなみに呪いのメイド服を着た人は風呂に入れないから臭くなり、臭いのせいで孤独死するらしいけど」

「兄貴イイイイイイ!!」

頭を抱えて発狂する舞夏を若干引き気味に顔を引きつらせながら頭の中で舞夏の兄  
||メイド服を集めるのが趣味という謎の式を立てる。

本来なら二人とも実施研修のため出かけている二人が真昼間にも関わらずこうしてガールズトークを繰り広げているのには訳があった。

佐天は一方通行の家に行く予定なのだが『今日は来る必要ない』と本人から直接言われ、舞夏は常盤台中学の厨房のキッチンや洗浄機などの一斉点検らしく偶然にも二人は非番だったのだ。

こうして夜しか話す機会がない二人が朝から仲良く話していたのだ。

そして二人が珍しく私服であるのも忘れてはいけない。

外出する日ではないため、滅多に着ることのない私服を着たのもある意味楽しみみの一つだったのかもしれない。

「しかし、メイド服を集める趣味を持つお兄さんか……」

「……兄貴がメイド好きだからといって別に兄貴にメイド服を集める趣味があるわけじゃないぞー」

「そーなの？」

「うむ。多分。恐らく……もしかしたら」

「全然ダメじゃん」

「くっ、兄貴の趣味を否定出来る材料が見当たらないー!!」

また頭を抱える舞夏を今度は華麗にスルーして開いているノートパソコンをカタカ

々と操作していく。もちろん彼女が調べているのはあらゆる都市伝説だ。『永遠に走り続ける地下鉄』や『能力が生み出すDNAコンピューター』など心が躍るものが沢山ある。

ニヤニヤしながら内容を確認していく佐天と、えらく不機嫌な舞夏、その二人がいる部屋に壊しそうな勢いでドアを開いた人物がいた。

「何だか楽しそうじゃないか！私も交せてくれないかね！」

たのもー！と言わんばかりの勢いで一人の少女が入ってきた。

黒い髪を縦ロールにした少女。しかし彼女は学校指定のメイド服ではなく蛍光イエローで出来たメイド服、ミニスカートにフリルつきのニーソックス、黒いコルセットと歴史の流れをブツツリと切断するその姿は、とりあえず舞夏からこう呼ばれている。

「あ、まがい物メイド」

「おい土御門、私をそういう風に言うのは聞き捨てならんな」

「やつほー鞠亜」

「よう佐天。お前は相変わらずだな」

彼女の名は雲川鞠亜。佐天と同じこの繚乱家政女学校に通う学生だ。この前の学内一斉テストで二十一位の成績を残し、惜しくも実施研修の枠から外れてしまった少女だ。

だが佐天達一年生の中では舞夏らに次ぐ三位の成績なのだ。つまり、この少女もエリートなのである。

「何をしてるんだ？」

「都市伝説について。さつき『呪われたメイド服』について調べてね」

「ふーん？」

「他にも色々あるけど見てみる？『どんな能力もきかない能力を持つ男』なんて面白そうだと思うない!？」

「でも都市伝説なんて、それを裏付ける証拠がないんだろ？根も葉もない話の何が面白いのかね？」

「そのミステリアス感がいいんじゃない」

「……あーやっぱ私には分かんないな」

そう言うのと鞠亜は「ふああ」と可愛らしい欠伸をして、眠たそうに目をこすっていた。入ってきた時のテンションは一体どこに行ったのやら。

「それで、お前は何しにきたんだー？」

「あー、それがさー……」

呆れるように話し始めた内容は鞠亜にとって、割と迷惑な話だった。

昨日は相部屋の女の子が彼氏と夜中遅くまで話していたせいであんまり眠れなかつ

た。寝不足だった鞠亜は昼寝をしたかったのだが、今日はお友達を寮の部屋に招き入れて今もワイワイ騒いでいるらしい。そういうわけで寝る場所どころか半強制的に部屋を追い出された鞠亜は寝る場所を探していた。

「というわけで寝かせて。つーか寝る」

「あ、おいー」

舞夏が何か言うより早く鞠亜は佐天のベッドに静かに寝転び、秒にも満たない時間で眠りに入ってしまった。

こうなってしまうのは舞夏も強く出ていかせるわけにはいかない。

言いかけていた言葉を胸の奥底にしまいこんで、鞠亜の方を睨んだ。しかし舞夏の位置では鞠亜の顔がベッドに腰かけている佐天に隠れて見えないので必然的に佐天を睨む羽目になってしまった。佐天は苦笑いをしながら、

「まあ別にいいんじゃない？ 昼寝だけだし」

「……まあいいけどなー」

しかし何だかんだ言って舞夏は鞠亜の実力は認めているのだ。恰好こそ無駄に派手でメイドらしくないが、学年の順位は自分の一つ後ろで料理以外の成績は自分とほぼ変わらず、格闘術においては手も足も出ない。

少し油断すればあつという間に首を狩られることだろう。だからこそ、舞夏はあんな

派手なメイド姿をしている鞠亜のことを必要以上に敵視しているのだが……それを口にする色々言われそうなので何も言わなかった。

主に佐天とか佐天とか佐天とか。

「ん？どうしたの舞夏？」

「……いや、何でもないぞー」

何かとお互い敵視している舞夏と鞠亜だが、しかし鞠亜とはあることに関しては意見が一致しているのだ。

それは、佐天のことについて。

この繚乱に通う一年生の中で誰よりも努力し、誰よりも愛想よく振る舞い……そして誰よりも結果が出なかった。

それは佐天の努力の仕方が間違っているとかではない。ただスタートラインが人よりも後ろにあったという、ただそれだけ。繚乱のレベルが高く、周りのみんなも勉強し成績を上げてくるので、その差が中々埋まらないのだ。

舞夏と鞠亜は入った時からエリートだった。もちろんエリートなのは二人だけではない。数百人いるメイド達の中には元々頭がよく、舞夏達と肩を並べるほどの実力者も少なくない。

普通ならそのエリートたちと付き合うのが定石だろうし、現に入学当初はそういう人

たちと付き合っていたこともあった。

しかしあることをキツカケに鞠亜と舞夏はエリートたちとあまり関わらなくなつた。

それは、とある放課後のことだつた。

繚乱の門を出てすぐのところ迷子らしき女の子がいたのだ。困つたように辺りを見渡し、誰かに助けを求めているようだが大人に声をかける勇気もなく、その場であたふたしていたのだ。

しかし繚乱に通う女子生徒は子供に声を掛けようとしなかつた。

それは彼女達が他人に優しくないからではない。ただ繚乱の授業のペースの異常な速さや抱えきれないほどの課題の量が彼女達を苦しませているだけ。

助けたいのは山々だが迷子だと思わしき女の子の相手をしていたら課題、復習、予習をする時間が一気に減ってしまう。だから皆迷子の女の子を見て見ないフリをした。

佐天涙子を除いて。



『どうしたの?』

佐天はその子と目線を合わせるようにしやがみ、ニコツと笑って聞いた。

『迷子になっちゃって……』

『どこに行きたいの?』

『……ココ』

地図を出し、行きたい場所に指差す。どうやら自分が通っている幼稚園に戻りたいらしい。聞くと、バスの中で寝てしまい最寄りより一つ後のバス停で降りてしまったのだと。

場所を把握した佐天は、何のためらいもなくその子を幼稚園に送ろうとしていた。

それを見ていた舞夏と鞠亜は驚きの表情を隠せなかった。

それもそのはず。佐天が向かう幼稚園は歩くには割と遠く、加えて自分たちが寝泊まりしてる寮とは正反対の方向なのだ。

それをするのが舞夏達エリートがするのであればまだ分からなくもない。元々の頭がいいということもあつて課題を終わらすスピードも早く、それでも中々終わらないのだが他の人たちよりは余裕を持って課題を終わらせることが出来る。

しかし佐天は違う。

誰よりも才能が無く、この繚乱の中で最も努力が必要とされている彼女。成績も悪

く、繚乱を基準にすれば物覚えも悪い。

そんな彼女には、誰かを助けている時間など無いというのに。

思わず、舞夏は佐天に声をかけていた。

『なあ佐天』

『あ、土御門さん。どうしたの?』

『お前そんなことしてる暇あるのか? こう言ったら悪いが、成績良くないだろ?』

失礼な言葉を発してる自覚はあった。だがクラスメイトとして、同じ部屋を共有する知り合いとしては、それを聞かすにはいられなかった。

佐天は困ったように笑って、言った。

『あはは、そうだね』

『だったらどうして……』

『確かに私は物覚えは悪いし授業には全然ついていけないし、課題も今から帰ってやつても終わるかどうかわからないだよ……うん、でもさ』

自分の気持ちを確かめるように一度頷いてから、佐天はこう言った。

『メイドになることに意識を向けすぎて困っている人を見捨てるっていうのは……本当

にメイドになることなのかなーって、思ったんだ』

その言葉に、舞夏と鞠亜は衝撃を受けた。

メイドとしての本質。

一体何のためにメイドになり、どんなメイドになりたいのか。

メイドのお手本とは何なのか。

メイドの目指すべき場所はどこなのか。

ただ知識があればいいわけではない。経験が全てを物語るわけでもない。

きつと、ここに通っている生徒はその事を忘れてしまっている。

先生の指示に従い、課題に追われ、考える暇もなく、ただ三年間勉強漬けで終わってしまう。

気付かされた。

思い出された。

一流のメイドを目指すということを。

「あの時佐天の言葉を聞いてなければ、私は本当の意味で紛い物メイドになってたかもな」

だから舞夏は佐天に関わり始めた。勿論今は友達だから関わっているが、最初はもつと別の理由で関わり始めたのだ。

なぜなら、あの時の佐天はこの学校に通う誰よりもメイドらしくて。

彼女と一緒に入れば、きっと本当のメイドを教えてくださいそうだったから。

――

――

――

――

『じゃあ一緒に行こっか』

『うん！ありがとうお姉さん！』

『どういたしまして！』

『……佐天、私も手伝うぞー』

『え？別に一人で大丈夫だけど』

『まあそう言うな。お前が道に迷ったらどうするんだー？』

『いやいや、そこまで複雑な道のりじゃないでしょ』

『じゃあ私もやりますかね』

『……えっと、貴方は？』

『隣のクラスの雲川鞠亜。まあよろしく』

『うん。よろしく……？』

『鞠亜と呼んでくれても構わないぞ？』

『え、うん？あの……』

『お前はついてこなくていいぞー雲川ー』

『おいおいそれは酷くないかね？土御門も同じものを感じ取ったのだろう？』

『む……』

『えっと……話についていけないんだけど』

『気にしなくていい。佐天には永遠に分からないことだよ』

『まあそう言うことだよ。まあ、強いて言うなら……私たちの自己満足ってところかなー？』

## 第十話 大事な仲間の存在に気づかされました。

成夏祭とは、普段一般へ解放されていない、この常盤台中学女子寮が年に一度門戸を開く日である。

今日は常盤台中学の生徒たちが招待した大切なお客様が来場する。それを恥ずかしくない立ち振る舞いをもっておもてなししようという常盤台中学のイベントだ。

そんな日でも、佐天達は変わらずメイド姿である。

舞夏や鞠亜同様基本的にはお客様ではなくお客様をもてなす側ということもあつてか、彼女たちの手に招待状は無い。

「というわけで私達も招待状をあげる側になったわけだけど、誰に渡した？ やっぱ舞夏はお兄さん？」

「いいや、兄貴に渡したら私の面子が潰れるからなー。兄貴の友達に招待状を送ったのさー」

「ふーん……じゃあ鞠亜は？」

「同級生に。そういう佐天は？やっぱ例の主さん？」

「……ううん、私も同級生に渡したんだ」

「おや？その様子は納得いってないようだね。これは渡したくても渡せなかったパターンかね？」

「喧嘩でもしたのカー？」

「うーん、そうじゃないんだけど……」

と言葉を濁す佐天に舞夏と鞠亜はおもわず首を傾げる。しかし佐天はそれ以上何も話そうとはせずに歩いていった。

その横顔がどこか寂しそうなのは気のせいだろうか。

「(……涙子のやつ)」

「(まーた何か抱え込んでいるな)」

幻想御手を通して多くのことを学んだのは決して幻想御手の渦中にいた人たちだけではなかった。それは友人である舞夏や鞠亜も同じ。

あの事件を通して佐天は悩み事を誰かに相談せず一人で解決してしまう性格だということを知った。だからこそ、舞夏や鞠亜もなるべく佐天の力になれるように努力したいと思っている。

なのに。



「あ、美琴さーん！」

どうしてこうタイムリングが悪いのだろうか。佐天は友人である御坂を見つけると駆け足で駆け寄っていく。

「いやー常盤台中学の生徒はメイド姿でもてなすって聞いてましたけど本当だったんですね!!」

「からかわないですよ。私だつてあんまりこういう姿をしたくないし、つていうかメイド姿じゃなくてもおもてなしぐらい出来るし……」

「でもお似合いですよ！」

「ありがとうございます……そうか、そういうえば涙子は毎日この格好なのよね」

「なんででしょう、物凄く眩された気がします」

営業スマイルでにこやかに笑った佐天にちよつと顔を引きつらせながら。

「ま、まあメイド姿も可愛いし……ね?」

「ですよね!じゃあこの姿の写真を一枚……」

「あー悪いんだけど寮生の撮影は禁止になっていて」

パシヤ。

「……聞いている涙子?写真は禁止って」

パシヤパシヤ。

「はい、聞いてますよ。つていうか撮ってるのは私じゃないですし」  
パシャパシャ。ああ、いいねえ。いいよお。

流石に気づいた。

フラッシュのしている方向をあっちこっち追いかけると、それは記録係という腕章を付けた白井がテレポートを駆使してありとあらゆる角度から御坂の写真を何枚も取っていたのだ。

「ツ！黒子！」

「あ、白井さん」

「ごきげんよう佐天さん……ああ、いいねえ」

「いいねじゃないわよ！　なんであんたが撮ってるのよ！」

「誤解なさらなくてくださいな。今日の黒子は撮影係、来年度以降の開催に向けてこうして参考写真を撮っているのですわよ。ですがお姉さま、こんなお召し物にも短パンを穿くのは如何かと。せめてドロワーズを穿いてやおへあい」

「くーろーこー？　どうして私のそんな写真が来年度以降の参考になるのかしら！」

むにー、と黒子の頬を引き延ばす。この見慣れた光景に佐天もただただ苦笑いしか出来なかった。

そうしていつものスキンシップをしていると、大きく開かれた扉の方から見慣れた人

物がやってきた。

「あ、初春」

「おはようございます佐天さん。ええっと、御坂さんと白井さんは……」

「いつも通り」

「おはよう初春さん」

「ほはほうへふほういはふ」

「アハハ……御坂さんも白井さんもおはようございます」

初春もいつもの御坂と白井を見て苦笑いしか出来なかった。しかしそれも一瞬のこと。常盤台中学の寮を首と身体を大きく動かしながら。

「す、凄い……これが常盤台中学!!」

お嬢様に超が付くほど憧れを抱いている初春は目をキラキラさせながら声を上げた。

「白井さん、ご招待いただきありがとうございます!!」

「いえいえ、今日は存分に楽しんで帰っていただくさいな。では私たちが案内を……」

「待てい」

と逃げるようにここから離れようとする白井の肩を掴んだのは舞夏だった。

「お前、撮影以外にも仕事があるのを忘れてはないだらうな？」

「……………」

「えっと、あの人は？」

「私と同じ繻乱学校に通う土御門舞夏。私と相部屋の人だよ」

首を傾げる初春に自分の寮生徒を紹介する佐天。

「じゃあそっちの黄色のメイドさんは……」

「あつちは雲川鞠亜。制服着てないけど同じ学校の生徒」

「へえ〜」

紹介された鞠亜はそれに気づいたのかエヘンと胸を張った。舞夏とは知り合いだったものの鞠亜とは初めて会った御坂も覗き込むように彼女の方を見ていた。

紹介が済んだところで、佐天は腕時計を見ながら、

「じゃあ私たちは仕事があるので先に行きますね」

スカートのフリルをくいっと持ち上げ小さくお辞儀をして、鞠亜と舞夏（と引きずられてる白井）と一緒に厨房の方へと向かっていった。

厨房に向かったといつても繚乱家政女学校の生徒全員が料理の準備をするわけではない。もちろんお昼時には駆けつけたりするのだが、まだ午前九時半。厨房もそんな忙しくない時間帯だ。

二十人の内十人は厨房で待機し、他の十人は常盤台中学の生徒と同じようにお客さんをもてなす側になる。

「こちら今日のパンフレットになります」

そして佐天は客をもてなす側へと回っていた。これは先生が決めたことなので仕方がないのだが、出来れば厨房に居たかった。この時間帯は凄く楽だから、というだけの理由で。

「お、サンキュー」

受け取った他学校の男子生徒は佐天に礼を言うのと、何かに気づいたのか唐突に足を止めてあたりをキョロキョロした。

「あ、あれ!? インデックスは!? さっきまで一緒だったのに!」

その男子生徒は焦ったように頭を掻き出すがまあそんなことで見つかるはずもない。変わった名前だとは思ったが恐らくその『インデックス』という子が彼の連れなのだろう。目線が下にある辺り恐らく年下?

迷子を探しているだけのはずなのに人にぶつかったり壁にぶつかったり階段に躓いたりして『不幸だ……』と嘆いている男子生徒を見ていた佐天は見ていられなくなり、

「迷子ですか？」

「上条さんは迷子ではありませんことよ!？」

「ち、違います! 迷子の子を探しているならお手伝いしようかなあと」

「……いいのか？」

「はい。折角ですから案内も兼ねて」

「本当助かる。実はある程度見当は付いていたんだが場所が分からなくてな……」

「じゃあ一度そちらに向かいますね!」

自分のことを上条と呼んだ少年と佐天は一緒にある場所へと向かっていった。

この時。

厨房が目まぐるしく忙しかったなんて思ってもみなかった。



「とうま！とうま！ここのご飯はとっても美味しいんだよ！」

「そりやあ上条さんが作るよりかは美味しいだろうよ。本物のメイドさんが直々に作ってるんだからな」

「にしても本当によく食べますねー」

コトつという音と共に新たな料理が置かれる。結局上条という男子生徒が探していたインデックスという少女は食堂でご飯を食べていた。

これだけなら特に言う事はないのだが問題なのはその量だ。既に十人前は平らげている。テレビに出ている大食いタレントといい勝負だ。ブラックホールが弟子に取りそうである。

その食べっぷりに厨房にいるメイド達はこんな時間から忙しくなるとは思っていなかったのか顔にいつもの笑顔はなかった。中には半泣きになりながら料理をしている人までいる。

そして偶然にも食堂に来てしまった佐天は当然の如く手伝わされる羽目になった。

手伝うのはいいが、それよりも上条という男子生徒が探していた少女の事の方が気に

なった。

制服でもなければ私服でもない白い修道服。学園都市ではありえないオカルトを信仰しているような、宗教とかやっついていそうな雰囲気だった。

確か上条という男子生徒はその子のことをインデックスと呼んでいたような……

「ちなみにインデックスっていうのは……」

「ああ、コイツの本名だよ」

「……目次じゃなくてですか？」

「ちがうよ。禁書目録のことだよ。あ、魔法名は *Dedicatus* 545だね」

「??？」

「あー気にすんな。コイツはちよつと頭のネジがおかしくてな」

「そこはかとなく馬鹿にしてるね？」

この二人……というよりはこの白い修道服を着た少女の言っていることが全く理解できないのだが、どうやら二人にしか分からない話があるようだ。さっきの魔法名とやらもきつと合言葉か何かなのだろう。

「うーん……とりあえずインデックスちゃんっていう名前なんだね？」

「そうだよ！あなたは？」

「佐天涙子です」



「るいこ、おかわり！」

「まだ食べるの!？」

その言葉を聞いた厨房にいるメイドさんたちは、三日三晩働き続けたような顔をしていた。それを見ていた上条は晩ご飯を考えるような気軽さで。

「しかし、お嬢様学校って言っても案外普通な感じなんだな」

「そうですね？」

「そりゃあ俺たちのシヨボい寮と比べたら全然こつちの方がいいけどさ」

「まあ美琴さんみたいな人もいますし、全員が全員お嬢様育ちってわけでもないですから」

「佐天さんもあんまりお嬢様って感じしないよな」

「っていうか私常盤台中学の生徒じゃないですよ？」

「適当なところで話を切り上げてせつせと皿を回収する佐天はあることに気が付いた。」

「そういうえば、知らない男の人と話すの久しぶりだなー、と。」

「普段繚乱中学や常盤台中学といった女子学校の友人が多いため男性と話す機会はかなり少ないのだ。だが先ほどの彼と話していてそんなに苦痛ではなかったというかスムーズに会話が出来たのだ。」

もしかしたら彼とは話が合うのかもしれない。

人柄の良さから友達も多い佐天はそれこそ友達に話しかけるような気軽さで。

「私は繚乱家政女学校の生徒です。今日はお手伝いなんですよ」

コトつと料理の皿を置く。目をキラキラさせながら料理に食いつくインデックスはその大食いつぷりに流石に苦笑いするしかなかった。

「あー、土御門の妹と同じか」

「舞夏の事をどこ存じで？」

「つていうよりソイツの兄の方だけだな。今日の招待状も土御門の妹に貰ったんだ」

「へー。舞夏のお兄さんってどんな人ですか？」

「妹をこよなく愛している変態」

「わーお……」

そういえば舞夏の持っている漫画は少女向けで十八禁ではないものの妙になまめかしいマンガを持っている。特に兄と妹でドロドロになるヤツが好きらしい。

兄が兄なら妹も妹というわけか。

あまり知りたくなかった友達の性癖を改めて認識したところで、佐天は一度厨房の方へ振り返った。

そこには先生が見たら雷が落ちそうなメイドらしからぬ表情が見て取れた。それを

見てから、上条達にこう言った。

「じゃあそろそろ他のところ回りませんか？せっかく来たんですし」

「お、そうだな。インデックス、そろそろ行くぞ」

「えーまだ食べたらないんだよ！」

まだ食べるのかよ、というツツコミは心の中に留めておいた。

でもそろそろこの二人（というよりインデックス）を食堂から離さないと流石にヤバい。主に厨房が。

「バクバク食べる女は嫌われるぞ！」

「私太らないもん」

「太らなくてもだよ。男性は清楚な女性を好む傾向があるから、今のインデックスちゃんを意中の男の子が見たらどう思うかな？」

「む……」

佐天の言葉を聞いて箸を止めたインデックスは少し考え込んだ。その後、割り切ったように今食べている料理を平らげて、両手の手のひらを合わせて。

「ごちそうさまなんだよ」

「うん！えらいえらい！」

くしゃくしゃと頭を撫でる。横では「おおっ!？」と猫が二本足で立ったのを見るよう

な驚き方をしていた。

「さて行きましょうか」

「すげえ、これがメイドさんか……!」

土御門や青髪がメイド好きな理由が少しわかったかもしれない。そう思った上条であつた。

—  
—  
—  
—  
—

そのやり取りをずっと見ていた常盤台中学の制服を纏った女性は身体の中を渦巻くモヤモヤした感情を抑えきれなかつた。

しかしそれを口に出すことはしない。というより今は出来なかつた。

それ以上に気になることが頭の中に映像として映り込んだからだ。

「(どうして第一位と……)」

彼女は手に持っているリモコンをカバンの中にしまいながら考える。

彼女はメイドを除けば至って普通の女子中学生。

能力はレベル0。

色んなスキルを持っているが飛び出ているモノはない。

だというのに、

御坂美琴と友人関係であり、第一位とも接触しており、あの女が気にかけていて、

そして何より。

「(どうしてあの人と仲良くなっていいのかしらあ!?)」

その彼女の隣にいるのは食蜂の意中の男性である上条当麻がいるのだ。記憶を覗いた限りでは彼らは今日が初対面のはず。だというのにどうしてあんなに仲が良いのだろうか。

自分のことは永遠に思い出してくれないかもしれない。

それでも自分の好きな男性が他の女の子と仲良く話しているのは気にくわない。

どうして彼がここにいるのかは分からないが、食蜂には一つの推測が頭の中にあつた。

「……そんなにメイドという響きがいいのかしらあ!」

結局、根本的などころで食蜂は中学二年生だった。

# 第十一話　　そう言えば新しい友だちが出来たんですよ！

ギラギラと照り付ける夏の日差しを全身に浴びながら佐天、御坂、白井の三人は初春の寮へと向かっていた。

その理由はというと。

「今日は楽しみですね！初春の学校にやってくる転校生！」

「やけに嬉しそうですわね佐天さん」

「そりやそうですよ！」

興奮気味に話す佐天に白井は相変わらずだなと思った。彼女の明るさは自分たちの倍はあるような気がする。

「そういえば最近地震多いですわね」

「そうなんですか？私達のところではそういうのはなかったんですけど」

「そうですね？同じ第七学区なのに不思議ですわね。このことについて私達風紀委員も調査に当たっていますの」

「へー」

「何かあれば連絡くださいな」

「はい!」

いつも繰り広げるような会話を話す白井と佐天だったが、御坂は眉をひそめてずっと佐天の方を見ていた。

それに気づいた白井は思わず声をかける。

「どうされましたお姉さま?」

「……ねえ涙子。間違つてたら悪いんだけどさ」

「はい?」

御坂は一拍置いてから、改めて問う。

「何か隠してる?」

足を止めて彼女の方を見つめる。

げっ、と顔が佐天の顔が突然歪んだ。この辺りがまだメイドの見習い故の未熟さかもしれない。

「い、いやあ……何のことかさっぱり」

「ほう?」

「待つて、タイム。頭ぐりぐりは勘弁。それはダメだつあたたたた!!」

「話さないならずっとこのまま……」

「話します！話します！だからこれ以上は危ないです！」

握った拳を佐天の頭から解放し、御坂は改めて問う。

「で？何があつたの？」

「……えつと、私がある人の世話係として雇われているのは知ってますよね？」

「そりやまあ」

「ずっと思っていたんですが『ある人』っていうのは一体誰ですの？」

「禁則事項です。『上』からそう言われているのでこればかりは言えません」

「……まあいいわ。それがどうかしたの？」

「……実は、最近世話係として行ってないんですよ」

「行ってないって……？」

「ここ最近ずっと連絡取れないし、寮の方に行ってももぬけの殻。ずっと避けられてい

まして……」

そう言う佐天の表情は先ほどの明るさと比べてもかなり暗い。

「心当たりはないの？」

「うーん……幻想御手の時にちよつと迷惑かけましたけど、そんなことで怒る人じゃな

いしなあ」

「ですが連絡が取れないのは心配ですわね。もしかしたらその人が何かの事件に巻き込



まれているのかも……」

「いやそれはないと思います」

「即答!？」

思わぬ返事に御坂は道端だというのに大きな声を上げてしまった。

「その人強いですし」

「……一応念のために誘拐事件がないか調べてみましょうか?」

「いやあ、多分時間の無駄じゃないかなあ……?」

御坂と白井には内緒にしているが、佐天が世話係として仕事をしている相手は学園都市の頂点に立つ男なのだ。その男が簡単に誘拐されるとは思えない。

でも仕事相手の事は他言無用にするようにと『上』から言われているのでどうも相談しづらい。相手の特徴を教えるわけにもいかないし、何より同じ超能力者が仲良くするとは思えない。もちろん御坂と彼の性格を考慮した上での考えだが。

「だから連絡が返ってくるまでは待つことにしたんです。結構気まぐれなところがあるのも確かですし」

「……まあ涙子が良いって言うならこれ以上詮索はしないけどさ」

と、佐天の悩み事も解決(?)したところで彼女たちは再び歩き出した。

寮で待っていたのはこちらに手を振り、柵川中学の制服を身にまとい、風紀委員の腕章を付けた花飾りの少女、初春飾利。

そして初春の隣にいるのが。

「えっと、この人が？」

「はい。春上さんです」

「春上衿衣なの？」

おっとりした表情と声で話す春上はどこか不思議な感じがする少女、というのが第一印象だった。

御坂達も自己紹介を済ませて初春の部屋に入る。春上の引越しの荷物の整理を済ませてから親睦会も含めて五人はデパートへと遊びに出かけた。

ゲーセンにプリクラ。途中白井と初春が風紀委員の仕事で抜けることはあったものの無事合流。

その後、花火大会のポスターに釘付けになる春上を見て花火を見に行こうということになった。

浴衣を着るために五人は一度それぞれに寮に戻るようになった。

デパートで買い物を買った後、佐天は浴衣に着替えるべく、一度寮に戻るために道端を歩いていたら、通行人がチラチラこちらを見ていそうな気がするがもう日常茶飯事なので気にしない。

そうして歩いていると、前方に見知った後ろ姿を見かけた。

「あ、美琴さん！」

声を上げてそちらへ駆け足で向かう。

普段なら名前を呼んだ時点でこちらを振り向くのだが今回は振り向かないことに疑問を覚えた。だが構わず向かう。

「美琴さーん?」

隣に立って、ようやく彼女がこちらを向いた。しかし、その格好……というか雰囲気はいつもと違っていた。

「それは私のことでしょうか?とミサカは確認を取ります」

「……んんん??」

何だろうこの違和感。

外見は常盤台の制服を身にまとった御坂美琴だ。だが何かがおかしい。

まず表情。こんな感情のない真顔なんて見たことない。

次に声色。何時もは心電図のように、声に弾みがあるのだが今は真つすぐ一直線、声の起伏が一切ない。

さらに口調。こんな変な喋り方をしていただろうか。

極めつけは頭の上にかけているゴーグルだ。スキーで付けるようなゴーグルを、それも夏休みになんで付けているのだろうか。

中身がごっそり入れ替わってもこんなに極端に変わらないだろうに。一体何があつたのだろうか。

「えっと、御坂美琴さんですよね?」

「ミサカはミサカです。とミサカは自己紹介をします」

「…………え?!?」

同じ日本語を喋っているはずなのに言っていることが全く理解できない。具体的には突然動き出す点P並に意味が分からない。

姉妹の可能性も考えたが御坂の話では一人っ子のはずだ。つまりこの御坂美琴は先ほどまで会っていた御坂美琴と同一人物ということになる。

じゃあ彼女がこんなことをするメリツトは?

そういえばこの方向は常盤台中学の寮とは逆方向であり、どちらかと言えば佐天の寮へと向かう方向なのだ。そう考えれば佐天に会いに来たと考える方が自然である。

じゃあ何のために?

この後待ち合わせしているから無理に自分に会いに来る必要はないわけだ。つまりそうでもしないといけない理由があり……

いや。

佐天ではなく他の人に会うためにこのキャラを作っている可能性があるのでは? というか、むしろそうとしか考えられなくなってきた。

そして御坂の性格を考えたら同性にこんなことをするとは考えにくい。

つまり。

「まさか……噂の彼氏さん!?!」

そして不幸にも。

佐天涙子は何時も通りの佐天涙子なので。

「(こんなレアな美琴さん滅多に見られないし、こっそり録画しちゃおう)」

ポケットの中にあるスマートフォンを操作して、ばれない位置からカメラで録画を開始する。

「それで美琴さんはどこに行くんですか？」

「研修です。とミサカは曖昧な言葉で逃げようとします。腕を掴まないでください」

「まだ逃げられちゃあ困るよねえ。取れ高少ないんだから」

「……とても面倒くさい匂いがします。とミサカはあからさまにため息をつきます。  
はあ」

「待つて本当に待つて」

「それでミサカに何か御用ですか？とミサカは早く用件を終わらせるように急かします」

「いやー、研修つて何かなー？つて」

「……ZXC741ASD852QWE96, 3。と念のためミサカは符丁の確認を取ります」

「……へ？」

「やはり関係者ではないのですね。ですので先ほどの質問にはお答えできません」

「えー……」

「ではここで失礼します。とミサカは丁寧にお辞儀をしてこの場から去ります」

そういつて御坂は去っていった。結局最後の最後まで御坂はあのキャラを押し通していた。

きつとそうしなければならぬ理由があるのだろう。御坂美琴が単純勝負で負けて脅されてああいう恰好をしているとは思えないし。

どういう経緯であんなことになったのかは全く想像できないが。

プルプルと電話が鳴り響く。

「もしもし舞夏？どうしたの？」

電話を取る頃には、推測することも忘れてしまっていた。



そして。

御坂美琴だと勘違いされたミスカは交番の前に来ていた。

「落とし物です。とミスカは女性が使いそうなハンカチを渡します」

「そうか。どの辺で拾ったか覚えてるか？」

「ここから50mほど行つた交差点を右に曲がつて——」

指さしながらメモを取る警備員に説明する。

それはメイド少女と出会う少し前に彼女の横を駆け足で通り過ぎた高校生ぐらいの女性がハンカチを落としたのだ。

直ぐに渡したかったが人混みに直ぐに紛れて捜査困難になった。

だから、ここは普段通らない道なのだがルートを変更してこちらに来ていた。

警備員の人からお礼を言われて交番から離れていく。

また感情のない表情を浮かべながら先ほどの少女について考え始めた。

『実験』に関して支障が出ているという報告があり、ミスカももちろんそのことについての事も頭に入っていた。

それが先ほどの少女。

具体的に何がどうなつて彼女が支障を及ぼすほどの力を持っているのか理解出来ない。『実験』の符丁も知らない彼女がどうして？と何度も疑問に思うが、今日少し話した



限りでは答えが見つからない。

研究者が言うにはあの少女を始末すべきか放置するべきか『上』が悩んでいるらしい。始末した際、どう彼に影響を及ぼすか推測出来ないからだそうだ。だからといってこのまま放置するわけにもいかない。

実験は、見えるところで少しずつ綻びが生じていた。

そんな曖昧な状態の中で、無慈悲にも『実験』は行われていく。

ミサカはコインロッカーに置いていたギターを入れるようなカバンを手にとって、指定の場所へと歩いていった。

## 第十二話　なんか様子がおかしいんですよね

お昼に御坂（？）と出会ったが、それ以外はなんの出来事もなく佐天は花火大会に行く準備をしていた。

しかし、彼女はメイド。あの時舞夏から受けた電話を聞いて落胆したのである。

「もー、なんでこういう日に限って夜店を手伝わないといけないの?」  
「言うな佐天。私達もこればかりはやりたくなかった」

佐天の隣にいる、タイ焼きを焼きながら首を振ったのは雲川鞠亜。彼女も今日の花火大会を楽しみにしていたのか、どこか元気がない。

既に河川敷に沿うように数多くの夜店が並んでいた。

定番の金魚すくいや仮面売りから、果物が入ったおにぎり売り場といった奇妙な店まで様々ある。

舞夏は隣の店で豪快に焼きそばを作っていた。あれに比べればタイ焼き屋はまだマシな方なのかもしれないが、

「ねえ鞠亜。なんで私達が夜店やんないといけないわけ?成夏祭みたいに手伝ってわけでもないんですよ?」

「売り込み。なんか年々繚乱に受験する生徒が減ってるからみたい」

「結局大人の事情かー……」

だからといって嫌なものは嫌なのだ。

花火大会となれば必然と小学生も集まりやすくなる。ここでメイドの良さをしつかりアピールしようという作戦らしい。

「仮に繚乱に入ろうという子が現れて、入ったとしてもあの厳しさと恐ろしさを体験することになるだろうな」

「平日は授業、祝日はボランティア活動を含めた仕事。休みも月に一回あるかないかだもんねー」

「実施研修生になっても授業が免除になるわけでもないし、中間や期末テストは平等に行われるし」

「公欠は取りやすくなるけど、その分授業をカバーするのが大変なんだよね。ただでさえ覚えることが山積みだっていうのに」

ハアと二人は同時にため息をついた。まだ一年の夏休みだというのに既に憂鬱だ。これから全く先が見えない。

いいや、鞠亜は何かを決心したようだ。

「卒業したら絶対平凡な高校に行ってやる。じゃないと気が済まない」

「いや、案外鞠亜はそのままメイドしそうだけだね。何か先生探してるっぽいし」  
「おい佐天。それどこで知った？」

「この前私の部屋で居眠りしたでしょ？その時にちよこつと」

「くつ……まさかこのルートからバレるとは……」

「その敵組織のスパイみたいなの返し何？」

「あ、でもこれでまたレベルアップに繋がったのではないかね！」

「才能ある人つてどこかズレてるよね」

今頃御坂達は春上と一緒に夜店を楽しんでいることだろう。

佐天はメイドであることを、この上なく恨んだ。

時間は無情にも過ぎていく。

数十分前に御坂達が自分のところに来て綺麗な浴衣姿を見せてくれたがどうしてか

心の底から喜べない。もちろん皆可愛かったしタイ焼きを買ってくれて売り上げに貢献してくれて助かったが嬉しい感情が湧き出ないのはあの四人の中に飛び込みたいからだろう絶対そうだ絶対そうに違いない間違いないあつ、

「(美琴さんにお昼のこと聞き忘れた……)」

お昼の御坂と別れてから考えたのだが、やはり御坂の様子がおかしかった。どう転んでも彼女があんな口調を取るとは思えない。まあ噂の彼氏さんの話もいつもはぐらかされるし、そこに何かしら秘密があるとは思うのだが。だが！

今の佐天にとってはそれを忘れるほど、佐天の心は沈んでいた。

ドン、という音が遠くから聞こえた。

恐らく花火が上がったのだろう。それをうちわで暑さを軽減しながらその花火を眺める。

綺麗だなあ。あの四人は絶景スポットから見てるんだろなあ。こんな夜店と木の間から見える扇形の花火ではなく、全景が見える花火なんだろうなあ。

ああ。そんな愚痴を心のなかでこぼし始めてから何分ぐらい経っただろうか。

ドオン!!と、突如地面が揺れだした。

鞠亜と佐天は飛び上がるように立ち上がった。

火事が起きないように慎重に対応しつつ周りを見渡す。そこには祭りに来ていた人たちや屋台を出していた人たちがパニックになっていた。その場に蹲る者、逃げ出す者、助けを求めて叫ぶ者。対してメイドの恰好をした三人は冷静だった。

鞠亜が二人の方を向いて指示を出す。

「土御門は屋台のガスの元栓の確認。私と涙子は人がいないか確認する」

二人はコクつと頷くと早速屋台を飛び出した。舞夏は料理のセンスが抜群で知識もこの中でも一番豊富だ。鞠亜は格闘術を学んでいるので怪我やその手当に関して詳しいし、佐天も小さな怪我の手当てなどはお手の物。それぞれの得意分野を生かして自分たちの役割を果たしていく。

「大丈夫ですか?」

「は、はい……大丈夫です」

佐天は色んな人を見て回っていた。しかしどうこうする必要はなかった。大きな地震がありながらも近くの建物等は倒れなかったし、けが人もいなかった。

少ししてから、舞夏、鞠亜と合流した。

「涙子、そっちは?」

「みんな大丈夫みたい」

「皆優秀だったからな、ガス栓も私が指示する間もなくみんな締めていたぞー」

「じゃあ私達がやれることはこれぐらいかね？」

「まあ、そうなるだろうなー」

しかし気になることがないと言えば嘘になる。

例えば。

「あそこの高台、落ちたけど大丈夫なのかー？」

そう、花火を見るのには絶好の場所、高台が土砂崩れのように落ちていたのである。

「……下には誰もいなかったはずだけど」

「上にいた人は多分大丈夫だと思う。白井さんがレポートで避難させていたのが見えただから」

「じゃあ、後は警備員の管轄だ。私達は大人しく戻るとするかね」

そう言つて三人は冷静になり始めた人達を避けながら自分たちの屋台へと戻つていく。

鞠亜も舞夏も佐天も、これは単なる地震だと思つていた。

しかし無情にも、事實は佐天の予想とは異なつていた。

次の日のことだった。佐天は御坂と一緒にレストランで涼んでいたのだが、話題はやはり昨日の花火大会のことになった。

「ポルターガイスト……ですか？」

「そう。別名RSPK症候群」

バニラアイスが載せられたメロンソーダをストローで飲みながら御坂は言った。

「能力者が一時的に自律を失い、自ら能力を無自覚に暴走させる現象よ。普通は同時多発するものじゃないんだけど、AIM拡散力場に干渉があった場合はそういうこともあり得るらしいわ」

「はあ……」

「幻想御手の時の事件に似てるわね。あれも結局はAIM拡散力場に干渉した犯罪だったし、木山も『手段は選ばない。気に入らなければまた邪魔しに来たまえ』って言うてたし」

「じゃあ美琴さんは木山先生が犯人だと思ってるんですか？」



「……確証はないからまだ何とも言えないけど、でも木山は第十七学区の特別拘置所に勾留中。木山が犯人である確率は限りなく低いでしょうね」

もう一ヶ月前の事であるが佐天は未だに鮮明に覚えていた。事件の被害者だからかもしれないが、アレは永遠に忘れることの出来ないような、そんな事件だった。

「難しい話でしたけど、何か怖いですね。あんな地震が色んなところで起こるなんて」

「そうですね。私も一刻も早く事件が解決してほしいと思ってるんですけど……」

昨日はたまたま被害がなかったものの、他の場所で昨日のような地震が起これば無事じゃ済まされないだろう。最悪死人まで出るかもしれない。そうなった場合、表向きにはただの事故と済まされていたのが一変する。恐怖に怯えた生徒たちがパニックになり、そのストレスからRSPK症候群——ポルターガイストを発生させてしまうという悪循環が生まれる可能性も出てくる。

「そういえば、その時いた春上さんの様子もおかしかったのよね」

「春上さんの？」

「そう。なんていうか、ここにいない誰かを探していたみたい」

「誰かから呼ばれてた的なやつですか？」

「分からないわ。本人に直接聞いたわけじゃないから。でも……」

「……でも？」

そこまで言って、御坂は言葉を濁した。

実は昨日そのことで白井と話し合っていたのだが、木山の次に怪しんだのが春上なのだ。

今まで第十九学区で多発していたポルターガイストが最近になってここ第七学区で頻繁に起こるようになった。それも、春上がこちらに転校してきたタイミングで。

もちろん御坂も白井も春上のことは友達と思っっているし、春上がそんなことする人物じゃないことは最近の付き合いで分かっている。だからその可能性を否定したのだが……

「それは根拠ある否定じゃないのよね……」

論理的な説明で否定できない以上、可能性として捨てきれない。

だが、友人としてこのことを話したくはなかった。

「何でもないわ。ただの勘違いだったみたい」

「……本当に？」

しかし相手は佐天だ。御坂が佐天の僅かな反応を見逃さないように、佐天も御坂の反応を見逃さない。自分では平常心を保ったつもりだったが、どうやらバレていたようだ。

ふうと息を吐き、隠すことを諦める。

「……実は、春上さんが犯人である可能性があるのよ」

「え？」

御坂の言葉に、佐天は一瞬自分の耳を疑った。

どういふことが聞いて、その理由を耳にして、しかしほんの少しだけ、筋が通つてい  
ると思つてしまった。

「確かに、その可能性はなくはないですけど……」

「もちろん春上さんを疑つてるわけじゃないわよ？ただそうとも考えられると思つただ  
けだね」

「分かつてます。でも、これは初春に聞かせられませんね……」

「……そうね」

風紀委員として働いていることもあるが、初春は春上に対して特に世話を焼いてい  
て、誰よりも春上を大切に思つていなのだ。そんな初春がこの事を聞いたら、きつとこ  
の上なく怒るだろう。

それをしつかりと頭に入れて、腕時計で現在時刻を確認してから、残りのオレンジ  
ジュースを一気に飲み干した。

「それじゃあ私メイドの仕事に戻りますね」

「うん。また明日ね」

御坂に手を振ってから、佐天は自分のジューズ代を置いてレストランを後にした。

一方通行の家には、今日も誰もいなかった。

## 第十三話 私一人じゃ何も出来ない

「はあ……」

寮に戻って初めに出了た言葉がこれだった。

結局今日も彼ははいなかった。まるで顔を合わせないように避けられており、何か嫌われるような行動をしたのかと振り返る日々。

考えても考えても分からず、あがいてもあがいても何も出来ない。もどかしい日々が続いている。

そんな姿を見ている同室の舞夏と、暇な時は大体この部屋にいる鞠亜は、佐天のことをひどく心配していた。

しかし彼女になんて言葉をかければよいかも分からないのも現状としてある。お世話をしている主人が突如姿を消し、ずっと会っていないことを二人は知っているからだ。

「ポルターガイストの事件もあるし、テストもあるし……ホント最悪」

「ポルターガイスト？」

佐天の言葉に反応したのは鞠亜だった。

「最近いろんなところで地震が発生してるでしょ？それがポルターガイストっていう能力の暴走みたいなものらしいんだけど」

「ほう」

「その犯人が私の友達じゃないかってなって」

「げっ、マジなのか？」

「もちろん私は違うと思うんだけど、それを否定する材料が今のところ見つからなくて」  
「どうして毎度毎度そんな厄介な事件に巻き込まれるんだ君は、と思わずツツコミたくなった舞夏と鞠亜だったが、それはグツと堪えて佐天の話を聞く。

「具体的な情報を教えてくれないかね」

「……うん？」

「オイ何でそんなこと教えなくちゃいけないのみたいな顔でこつちを見んじゃねーよ」

思わずツツコミをしてみた。

「いやいや、これは鞠亜が悪いのではない。こちらの発言に対して素っ頓狂な顔を浮かべている佐天が悪いのだ。」

「まあ、自分で抱え込もうとしている。」

「佐天の悪い癖だ。自分が出来ない役に立っていない責任を、誰にも相談せず、誰にも打ち明けることなく一人で抱え込んで、一人で沈んでいく。」

誰かに相談するという事をせず、誰かに手伝ってもらおうという概念が最初から欠如している。

人は初めから万能ではない。

それは佐天だけでなく、舞夏も鞠亜も。学園都市レベル5の第3位、御坂美琴だって例外ではない。

誰だって出来ないことの1つや2つはある。その時大切なのは出来ない自分を責めて一人で抱え込むのではなく、誰かに相談して一緒に乗りこえることが重要なのだ。

佐天はそれが出来ない。それは遺伝子がそうさせているのか、生まれた環境がそうさせたのかは分からないが。

でもそれで佐天は一度倒れて、病院に運ばれ、このまま眼を覚まさないかもしれない事態にまで発展した。

あの事件を経てもなお抱え込んでしまう原因が分からない。舞夏と鞠亜には理解できない。

それでも。

いいや、だからこそ。

「とにかく話してみてよ。私達も協力するからさ」

「そうどうぞー。三人寄れば文殊の知恵と言うしなー」

無理にでもこちらのフィールドに引きずり込む。また佐天が間違いを犯さないように。

「……」

佐天は二人の発言に、言葉を詰まらせた。少し悩んでいるようだ。

二人はただ切に願うしか無い。二人にとって佐天は大切な友達。苦しんでいる姿なんて見たくないし、悩み苦しんでいるなら助けてあげたい。

もう部外者になるのはゴメンだ。

彼女が巻き込まれた事件を外から眺めるだけで終わるのはもう嫌だ。

幻想御手の事件の時、舞夏と鞠亜は何も出来なかった。

気づいたら佐天は幻想御手を使用しており、その副作用で倒れていて、そして回復を願っている間に彼女は眼を覚ました。

何も出来なかった。何もしてあげられなかった。

大切な友人が苦しんでいる時に、呑気に生活を送ることしかしていなかった。そんな後悔が今でも二人の中に付きまとっている。

だからこそ手を差し伸べる。

彼女が手を取ってくれるのを待っている。

そして。



その二人の意志を感じ取ったのか、佐天は思わず手を伸ばした。

「じゃあ、お願いしてもいいかな？」

僅かに微笑んで、二人が差し出してくれた救いの手を、迷いながらも手を取ってくれた。  
た。

「ようしそれじゃあ聞こうじゃないか！まずはその友達とやらのことについてな！」

鞆亜は喜ぶように言葉を発した。また舞夏も口には出していないが笑みを零して佐天を見つめていた。

ようやく。

本当の意味で、佐天の友達になれる。

なんとなく一緒にいるメンバーという扱いではなく。

雰囲気が集まった偽りの友情ではなく。

当たり前のように笑い合い、当たり前のように助け合える、そんな友達に。

違·う。

こ·れは私·の問·題。

私·が解·決しな·ければい·けな·い問·題。

私·はメ·イド。

優秀なメイドにならなくてはならない。

あの人が逃げたのだって、あの人が発していた赤信号を感じ取れなかった私のせい。勉強が出来ないのだって、私がつとしっかり出来ていれば皆に手伝ってもらわなくても必要なんてなかった。

今回の事件も、解決に必要なヒントはたくさんあったはずだ。それを察することが出来なかったから、関係ない人に迷惑をかけてしまっている。

ああ。

私って、何をするにしても、誰かに手伝ってもらわないと何も解決できない。

自分の仕事も。

勉強も。

友人のトラブルも。

一人じゃ何も出来ない。

御坂美琴のように電撃を使った爆発的な力があるわけでもなく。

白井黒子のように瞬間移動で誰かを助ける力があるわけでもなく。

初春飾利のように情報処理に長けたサポートが出来るわけでもなく。

雲川鞠亜のように能力を組み合わせた武術が使えるわけでもなく。

土御門舞夏のように料理で万人の舌を満足させるわけでもなく。

ただただ平凡。

メイドを除けば至って普通の女子中学生。

能力はレベル0。

色んなスキルを持っているが飛び出ているモノはない。

ああ。

やっぱり、無能じゃん。私。

「ふうん。『特定波長下においては例外的にレベル以上の能力を発揮する場合がある』  
ねえ」

先程全ての説明を終えて、現在春上衿衣という少女について調べている。

学園都市の総合データベースである『書庫』にはもちろん春上のことについても記載がされていた。

能力は精神感応のレベル2。普通のレベル2ならば大規模地震のようなポルターガイストを起こすことは不可能。だが能力の参考欄に書かれている最後の一文が春上を犯人でないと断言させてくれない。

「この特定波長下ってなんだろうなー？」

「んー分かんない。情報が少なすぎるなあ」

「うーん……美琴さんなら何か知ってるかも」

「お、じゃあ電話して聞いてみてよ」

うん、と答えて佐天は電話帳を開く。御坂美琴と書かれている文字をタップすると、電話番号が表示された。

佐天はその電話番号を迷わずタップする。

『もしもし涙子？』

「夜分にすみません。今ちよつといいですか？」

『いいわよ。こつちも調べ物をしている最中だったし』

その調べ物とやらが春上衿衣という少女のことであると思うまで、そう時間は掛から

なかった。

佐天は『書庫』に記載されている春上の情報を見ながら、御坂に自分たちの疑問を投げる。

「今春上さんのことについて調べているんですけど、参考欄に書かれている事がよく分からなくて……」

『うん。私もそこについて黒子と議論していたところよ。今回のポルターガイストとここにある特定波長には何らかの関係があるんじゃないかって』

「でも情報が少なすぎてこっちも手詰まりなんですよね。結局春上さんが犯人かもしれないという事ぐらいしか」

『……確かに、結局どんなに考えても推測の域を出ないけど、私達の今の考えを言っていないっ！』

少しトーンを落とした御坂の声に思わず息が詰まる。

まだ内容は分からないが、御坂と白井が考えていることはかなり深刻な事態かもしれない。

その心構えを持って、携帯電話をスピーカーにして二人にも聞こえるようにして、佐天は御坂の言葉に耳を傾けた。

『結論から言うと、ポルターガイストは無意識に春上さんが起こしたものだと思ってる』

残酷な宣告が御坂の口から告げられた。

いくら推測であるとは言え、皆の友達、特に初春ととても仲のいい春上を犯人だと言  
い切ったのだから。

『その理由なんだけど、そもそも精神感応（テレパス）ってどういう原理でやってるか  
知ってる？』

「いや、わかんないです」

もちろん佐天は精神感応自体がどのような能力なのかは知っている。

精神感応は自分の思考を相手に読ませる能力。自分の考えていることを言葉として  
発し、相手の鼓膜を通じて伝えるのではなく、脳に直接語りかけるようなもの。

しかし、それがどのような原理かまでは考えたことがない。

『精神感応は相手に直接言葉を伝える。その際大事なのは自身の思考を圧縮して相手に  
送り、それを相手が無意識的に、もしくは送る側が脳に触れた途端自動的にファイルを  
解凍するようにする。受信側はその思考を理解する』

「えつと……？」

『返信出来ないメールを送っていると言えればわかりやすいかしら？』

「あつとつても分かりやすいです」

『それを私達人間には感じられない波長で相手に送っている。これが精神感応の原理

よ。ここまでは理解できた?』

「はい。理解できました」

これが御坂美琴のすごいところの一つであり、佐天も尊敬している部分だ。

人は説明する時に分かりやすく説明しようとしても上手くいかないもの。それを誰にでもわかるたとえで複雑な原理を一瞬で理解させるのは、やはりレベル5というのは伊達ではない。

『それを踏まえて春上さんの能力の特定波長下つてという言葉は、恐らく思考の送受信の際の波長に関することだと思うの』

メールを送る際に電波が必要なと同じように、精神感応で人に思考を送るときも波長が必要となる。

『その波長がある一定の数値になった時に春上さんはレベル以上の能力を発揮することが出来る。つまり特定の誰かと交信した時に、起こるんだと思う』

「特定の、誰か……」

『恐らくその特定の誰かを明らかにすることがポルターガイスト事件の解決に一步近づけると思うわ』

「そうですね。でも学園都市230万人もいますし、その中から一人を特定するのって難しくないですか……?」



『そうね……私達の方だけでは難しいかもしれないわね。テレステイナーさんにも協力を仰いでみるわ』

「テレステイナーさん？」

『今日のポルターガイストの際に初春さんと春上さんを助けてくれた人よ』

「そうなんですわね」

『うん。そつちで何かわかったら連絡してね。こつちも何かわかったら連絡するから』

「了解です」

『それじゃあ、おやすみ』

「おやすみなさい」

そう言つて佐天は電話を切つた。

御坂の言葉を黙つて聞いていた二人の方を向いて、佐天は話し始める。

「今の話、どう思う？」

御坂と白井は春上が犯人である可能性が高いと考えていた。

佐天は春上が犯人だとは思いたくないし、その可能性を否定するような材料を求めはいるが、御坂の話を聞いて、正直心が揺らいでいる。

だからまず、二人の話を聞きたかつた。

舞夏は。

「単純に考えれば、その春上つて子が犯人だろうな。しかも話を聞く限りその子は自分の意思とは関係なく起こしてゐるんだろ？ 厄介だよな」

舞夏はいつもの口調でそう言った。まるでテレビを見ながらドラマのヘタレ主人公にボヤキを入れるような感じだった。

彼女がそう考えるのも無理はない。御坂の話は筋が通っているし、春上が犯人でない証拠がない以上、そう考えてしまうのが妥当だと言える。

対して鞠亜は、先程から考える仕草をして、ずっと黙り込んでいた。

「鞠亜は？」

「……んあ？ あ、さっきの御坂さん？ の話ね。私はその人の意見に肯定よ。だって、そもそもポルターガイストが起こった震源に何回も居合わせてる当事者でしょ。それもポルターガイストが起こる時に限って様子がおかしくなるって話だったし、やっぱその友達が犯人なんじゃない？」

「でもさっきからずっと考え込んでるし、何か引つかかっているんじゃない？」

苦し紛れだとは思う。しかし、こうでもしないと初春も春上も悲しい結末を迎えることになってしまう。佐天はそれを避けたい。

でも、返ってきた言葉は、佐天の予想に反するものだった。

「いや、私が気になつてるのはテレステイナーという人の方」

「え、そつち？」

「どっかで聞いたことあるのよね、この人……」

こんな特徴的な名前をそうそう忘れるとは思わないが、それは春上を無実を証明する手がかりでも何でもなかった。

この残酷な事実を初春に伝えるべきだろうか。

いや、佐天が言わなくても白井が初春にこれを伝えるだろう。それを止めるのは佐天には出来ない。

彼女はこれを聞いて、真摯に受け止めることが出来るだろうか。

二人の……いや、四人の間に亀裂が走ったりしないだろうか。

そんな不安を抱えながら、佐天はベッドに身体をダイブさせた。

疲労とストレスもあってか、寝落ちするまでそう時間は掛からなかった。

## 第十四話 情報が欲しい

朝起きて、最初に頭をよぎったのはあの名前。

『テレビステイナー』

「(私はどこでこの名前を聞いたんだ……?)」

ありふれた名前ではない。日本人が日本で過ごしている限り耳にすることがない名前。つまり鞠亜は何らかの形で、それも頭の片隅に残るような覚え方で記憶したことになる。

情報は色んなところにありふれており、インターネットが普及した現代では、様々な形で入手することが出来る。

テレビ、パソコン、携帯、新聞、雑誌、友人の話など。

鞠亜はお世辞にも友達が多いわけではない。友人から聞いた線は低いか。

新聞、雑誌は殆ど見たことがない。この可能性も低いだろう。

普段積極的に使わないパソコン、携帯で入手する情報なんて皆無に等しい。

するとテレビから聞いたのか？だが頭の中に残るほど印象が深かった外国人なんていただろうか？

いいや、あるとすれば。

そう思い、鞠亜は携帯電話を取り出した。

連絡帳アプリを開きスクロールする。「く」のところにある、自分に似た名前が書かれた欄をタップした。

『こんな時間になんの用？忙しいから手短にしてほしいのだけど』

そう、相手は鞠亜の実の姉、雲川芹亜である。

しかし実の妹からの久しぶりの電話だというのに何でそんな気だるそうな返事をしているのだろうか。

だが、姉が何をしているかなんて妹の鞠亜はあまり把握していないため、特に言い詰めるようなことはしなかった。

「あーごめん。じゃあ手短に話すね」

『頼む』

「単刀直入に聞くけどさ、テレスティーナって名前に聞き覚えある？」

『……何？』

その瞬間、妹からの面倒な電話に対応するような雰囲気が消えた。

声のトーンが低くなり、明らかに不審がるような雰囲気醸し出した。

『その名前どこで聞いた？』

「え、いや、今ポルターガイストの事件に関わっていて、それでその人の名前を知って……ってどうしたの急に」

しかし妹の質問に耳を傾ける様子はなく、芹亜は質問を投げかける。

『それに彼女は関わっているのか?』

「あー……ガッツリ関わってるよ」

『……そうか……どうしてこう何度も何度も』

「姉さん?」

『なんでもないけど。ああ、そうだな。質問のことだけだ』

ようやく、答える気になったようで、鞠亜は芹亜の言葉を待った。

そして、芹亜の口から聞こえてきた言葉は、鞠亜にとっても無視できない言葉だった。

『奴は木原一族の女だ』

「……木原!」

なぜ鞠亜がテレステイナーの名前に聞き覚えがあったのか。

そうだ。あの時の私はどうかしていた。先生が全てで、先生がいなくなっても落ち込んでいた。

だから先生の居場所が知りたくて、それでネットや知人に聞きまくって、でも結局見つからなくて。

その過程で、木原一族の事を知ったんだ。

『どうせポルターガイストとやらも何かしら別の目的で動いているだろうけど』

「別の、目的？」

『木原が善意的な活動をすると思えないのだけど』

鞠亜は木原のこの内部まで知っているわけではない。

鞠亜は木原が行った具体的なことまで知っているわけではない。

ただ、何となくモラルに反したことをしている集団だという認識があるだけ。

しかし、それだけで好意的に思えないぐらいには危険な集団だと認識させられる。

『仕方がない。私達も裏で手を回すでしょう。そんな問題に手間をかけては意味がな

い』

「ずーっと気になってたんだけど、どうしてそこまであの子に執着するのかね？」

『今は知る必要がないけど、そのうち分かる』

「まーたそれ？いつになったら教えてくれるのさ！」

『とにかく、こちらでも動くから。その時には鞠亜にも手伝ってもらってから準備してほしいんだけど』

「……ハア、了解」

不満たらたんな様子で返事をしたが、興味がないのか芹亜は全く気にもとめずに電話

を一方的に切った。

どうやら教えてくれるのはまだ先のようだ。

一番気になっていいることを教えてくれなかった事に対してフラストレーションが溜まったが、結果的には芹亜に電話して正解だった。

この事件には木原が関わっていること。

姉が協力してくれること。

鞠亜は姉の芹亜が今どこで何を目的にどんな行動をしているのかはわからない。権力のある人達と何かしらしているとだけは聞いているが、それ以外は一切不明。

しかしそれでも十分。

学園都市の偉い人達と繋がっている人脈を利用できるなら、近い内にこの事件も収束できるだろう。

もちろん鞠亜もいつでも動けるように準備は欠かさずしておく。

問題は佐天だ。

本来なら佐天なんかと友達になんかならず、もつと成績のいい人たちと一緒に行動し、自分のスキルを高めながら先生探しに没頭していただろう。

しかし姉の依頼でそのプランが今の所全くできていないのだ。

姉の芹亜からは、『佐天涙子という女性を監視してほしい』とのこと。



正直意味が分からなかった。理由も聞かされていないこともあるが、何より頭が悪く成績もダントツの最下位。何か飛び出ているスキルも無い上に能力もレベル0。

しかし姉の命令には逆らえず渋々佐天に近づき、鞠亜は最初は過ごしていた。億劫だと思った。

辞めたいと思った。

命令に逆らおうとも考えた。

だがその考えはある日をキツカケに一変した。

前提として繚乱家政女学校はその辺の中学校とは宿題や課題の数が尋常じゃないぐら多い。

それこそあらゆる局面で主人を補佐することの出来るスペシャリスト育成を目指しているメイド養育施設。土曜も日曜も無く夏休みも存在せず、「真のメイドさんには休息はいらなくてのが校則」であるほどだから。

だからこの学校に通う生徒はどうしても自分中心になりやすく、周りに目が行かなくなるものだ。

しかし佐天は違った。

繚乱家政女学校の前で困っている人を助けたのだ。

誰もが見て見ぬ振りをして、自分に課せられた義務を言い訳の盾にして、逃げるよう

に立ち去っていく中で、たった一人だけ。

あの時鞠亜は彼女が天使に見えた。

誰よりも優しくて。

誰に対しても心が広くて。

そして。

この繚乱家政女学校に通う生徒の誰よりも、メイドらしいと思ってしまうた。

自分に足りないもの、メイドになる上で必要なことを教えてもらったような気がしたのだ。

だから彼女の力になりたい。

お世辞にも優秀とは言えない彼女だけだ。

誰よりも努力して這い上がろうとしている彼女の姿はとても眩しいものだから。

でも彼女は人の助けを嫌う節がある。

それは幻想御手という前科があるからなのかもしれないが、それ以上に根つこの部分で自分が何もできないということに対してのコンプレックスがあるのだと思う。

だからこそ誰にも助けを求めずに、自分の力だけで解決して、自分は無能ではないと自分自身で証明したいんだろう。

だけだ。

「それは違う……！」

誰も一人で何も解決できない。

誰かの助けなしでは生きていけない。

誰の助け無しでできている人も、表面上はそう見えているだけで、裏では誰かの力を借りて解決しているのだから。

「きつとわかってもらえる。だって、友達だから……！」

そして。

その考えは何も間違っていない。

分かってもらうために行動に移すこと自体もきつと正しい。

いや。

一つだけ、見誤ったことがあるとすれば。

佐天が抱えている『無能』というコンプレックスは。

鞠亜の想像を遥かに超えた闇だったということだろう。

――

――

――

――

次の日、学校の授業が終わって放課後になった。いつもの通り佐天、舞夏、鞠亜の3人は佐天、舞夏の部屋へと集まっていた。

基本的には今日の授業の復習だったり、明日の課題の予習だったり、佐天の都市伝説の話などが繰り返られるのが彼女らの日常だった。

しかし、今日は違った。

話の軸になったのは、ポルターガイスト。

「で、結局ポルターガイストを引き起こしたのは春上っていう女の子なのか？」

今日の実習で作ったクッキーを頬張りながら、相変わらずの口調で舞夏は佐天に問いかけた。

「うーん、どうだろ。まだ仮定の段階だしね」

「佐天はどう思ってるんだー？」

「そりゃあ友達としてはそんなことしてるとは思いたくないけど、情報が無いから」

「まあ、情報があつたとしても、動けるかどうかはまた別問題だしなー」

「う……確かに」

そう、彼女たちは繚乱家政女学校に通う生徒。その課題やボランティアの数は計り知れず、どれだけ効率よくやっても丸一日フリーになる日ほぼゼロといつても過言ではない。

それは休日であつても同じ。一流のメイドになるには休日を返上してでもスキルを磨かなければ無理な世界。

草野球を突き詰めた人がプロ野球選手になるように。

毎日球を蹴っていた人がプロサッカー選手なるように。

メイドもまた、家事や人のサポート役を突き詰めた人がなれるもの。

生半可な取り組みではやっていけないのだ。

「結局、美琴さん達の力になれないのかな……」

佐天はため息をつくように言葉を吐いた。何もできないというもどかしさが、やはり佐天の心を暗くしてしまう。

舞夏だつて何とかしてやりたいのだが、状況が状況なだけに手が出しづらいのが厄介

だ。

「真実が完全に解明されていない以上、自分がどの役割を担えばいいのか不明なのだ。ら。」

佐天と舞夏は自分たちが何もできないことに暗く沈み込んでしまった。  
と。

「すげえな姉さん……」

その中で一人、鞠亜は携帯電話を画面を見ながらポツリとつぶやいた。

「どうしたの?」

佐天が問うと、鞠亜は僅かに微笑んでから、二人に言った。

「情報が手に入った。先手を打つチャンスが出来そうだ」

その言葉に、思わず佐天と舞夏は顔を合わせてしまった。

しかし鞠亜は笑みを崩さない。まるで、勝機は自分たちにあると訴えかけているようだった。

「私たちがメイドにだって主役になれることを、思い知らせてやるうぜー!」